

史跡 永納山城跡Ⅳ

—史跡整備に伴う事前確認調査報告書—
(令和2年度調査)

2022年3月

愛媛県西条市教育委員会

史跡 永納山城跡Ⅳ

—史跡整備に伴う事前確認調査報告書—
(令和2年度調査)

2022年3月

愛媛県西条市教育委員会



1 東側上空から見た北東部城壁 2020.9.10 撮影



2 R2-4 トレンチ城壁検出状況（東から） 2020.9.10 撮影



3 R2-4 トレンチ土壘検出状況(東から)



4 R2-4 トレンチ土壘断ち割り状況

序 文

史跡永納山城跡は、7世紀の後半、東アジア社会の国際緊張関係が高まる中、瀬戸内海の要衝の一つである当地に国家防衛の一翼を担って築かれた古代山城です。

昭和50年代の遺跡発見から平成17年の史跡指定を経て、平成18年度にはこの大切な史跡を未来に向け適切に保護していくための保存管理計画を策定しました。

そして、平成27年度にはそこで定めた基本方針に基づき、その後の各種確認調査成果を反映させた史跡永納山城跡保存整備基本計画を策定し、平成30年度に保存整備基本設計を行いました。現在、これらの計画・設計に基づき、令和元年度から現地の整備を進めています。

今回の調査では、基本計画・基本設計で示した史跡整備を実現するための事前確認として、城内部と北東部の城壁の調査を実施しました。

今回の調査成果がこれから現地整備を行う上での基礎資料となるとともに、本報告書が地域文化の理解や学習に活用されることを願っています。

最後になりましたが、事業全般にわたり、各方面においてご理解とご協力をいただきました市民の皆様方、さらにご指導とご助言を賜りました保存整備検討委員会の先生方をはじめとする関係各位・関係機関の皆様方のおかげで、今回多くの成果を上げることができたことを厚くお礼申し上げます。

令和4年3月

西条市教育委員会

教育長 伊藤 隆志

例 言

- 1 本書は、令和2年度に国庫補助事業として実施した愛媛県西条市河原津乙7-72他に所在する史跡永納山城跡の発掘調査の報告書である。
- 2 本事業は西条市が事業主体となり、西条市教育委員会が事務局として実施した。
- 3 本書に使用した座標系は世界測地系であり、方位は座標北を示す。
- 4 本書における土層の色調及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』（農林水産省林技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
また、堆積粒子の粒径は、ウェントワースによる粒度区分を用いた。
- 5 本書の執筆は第3章第2節を岡島俊也が、それ以外を渡邊芳貴が行い、編集は渡邊が行った。
- 6 出土遺物及び関係資料は、西条市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 発掘調査の目的と経過	1
第1節 発掘調査の目的	1
第2節 調査組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第2章 史跡の概要と現状	5
第1節 指定の概要	5
第2節 永納山城跡の概要	7
第3章 発掘調査成果	13
第1節 内部トレンチ調査の成果	13
第2節 北東部城壁の調査の成果	22
第4章 総 括	27
第1節 城内遺構の確認調査	27
第2節 北東部城壁確認調査	27
第3節 おわりに	32

挿 図 目 次

図 2-1 永納山城跡 史跡指定範囲図 6	図 3-6 R2-2 トレンチ北壁・南壁断面図 19
図 2-2 土地所有状況図 6	図 3-7 R2-3 トレンチ平面・断面図 20
図 2-3 古代山城分布図 7	図 3-8 R2-3 トレンチ平面・断面図 (注記) 21
図 2-4 永納山城跡周辺地図 9	図 3-9 R2-4 トレンチ位置図 22
図 2-5 永納山城跡調査位置図 10	図 3-10 R2-4 トレンチ周辺地形図 23
図 3-1 R2-1 ～ 3 トレンチ位置図 13	図 3-11 R2-4 トレンチ平面・立面・断面図 24
図 3-2 調査地周辺地形図 14	図 3-12 R2-4 トレンチ断面図 25
図 3-3 R2-1 トレンチ平面及び北壁断面図 16	図 4-1 北東部城壁調査地点の位置図 28
図 3-4 R2-1 トレンチ西壁・東壁断面図 17	図 4-2 北東部城壁の土塁 (S=1/60) 30
図 3-5 R2-2 トレンチ平面及び東壁断面図 18	

挿 表 目 次

表 2-1 史跡指定地の構成 5

写 真 目 次

巻頭カラー

- 1 東側上空から見た北東部城壁
- 2 R2-4 トレンチ城壁検出状況 (東から)
- 3 R2-4 トレンチ土塁検出状況 (東から)
- 4 R2-4 トレンチ土塁断ち割り状況

本文中写真

- | | |
|---|--|
| 写真 1-1 調査前の草刈り作業 (R2-3tr 周辺) 3 | |
| 写真 1-2 重機による崩落土除去 (R2-1tr) 3 | |
| 写真 1-3 トレンチ精査 (R2-2tr) 3 | |
| 写真 1-4 調査前の R2-4tr (東から) 3 | |
| 写真 1-5 R2-4tr 土層剥ぎ取り作業 4 | |
| 写真 1-6 保存整備検討委員会での検討風景 4 | |
| 写真 1-7 R2-4tr 埋め戻し状況 4 | |
| 写真 2-1 永納山城跡遠景 (南から) 8 | |
| 写真 2-2 永納山城跡遠景 2 8 | |
| 写真 3-1 調査地遠景空中写真 (南東から) 14 | |
| 写真 3-2 R2-1・2tr と南東部の尾根 (西から) 15 | |
| 写真 3-3 R2-3tr からみた R2-2tr と南東部尾根 15 | |
| 写真 4-1 北東部城壁の写真 31 | |

写真図版

- | | |
|---------------------------------------|--|
| 写真 1 R2-1tr・R2-2tr・R2-3tr の位置関係 (南から) | |
| 写真 2 R2-1tr (ブルーシートの場合) から見た南東部尾根 | |
| 写真 3 R2-1tr 調査前 (南から) | |
| 写真 4 R2-1tr 掘り下げ中 (南から) | |
| 写真 5 R2-1tr 11 層検出状況 (南から) | |
| 写真 6 R2-1tr 17 層掘り下げ中 (南から) | |
| 写真 7 R2-1tr 調査停止面 (南から) | |
| 写真 8 R2-1tr 北壁 | |
| 写真 9 R2-1tr 東壁 | |
| 写真 10 R2-1tr 西壁 | |
| 写真 11 R2-2tr 調査前 (北から) | |
| 写真 12 R2-2tr 掘り下げ中 (西から) | |
| 写真 13 R2-2tr 16 層礫検出状況 1 (西から) | |
| 写真 14 R2-2tr 16 層礫検出状況 2 (西から) | |

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 写真 15 R2-2tr 東壁沿いの断ち割り状況 (西から) | |
| 写真 16 R2-2tr 東壁沿いの断ち割り状況 (北から) | |
| 写真 17 R2-2tr 東壁 (スケールあり) | |
| 写真 18 R2-2tr 東壁 | |
| 写真 19 R2-2tr 北壁 | |
| 写真 20 R2-2tr 南壁 | |
| 写真 21 R2-3tr 付近から見た南東部尾根 | |
| 写真 22 R2-3tr 調査前 (西から) | |
| 写真 23 R2-3tr 東壁 (スケールあり) | |
| 写真 24 R2-3tr 東壁 | |
| 写真 25 R2-3tr 南壁 (スケールあり) | |
| 写真 26 R2-3tr 南壁 | |
| 写真 27 R2-4tr 調査前の状況 (東から) | |
| 写真 28 R2-4tr トレンチ設定後 (東から) | |
| 写真 29 R2-4tr 土塁検出状況 (北東から) | |
| 写真 30 R2-4tr 土塁検出状況 (東から) | |
| 写真 31 R2-4tr 土塁検出状況アップ (北東から) | |
| 写真 32 R2-4tr 尾根頂部付近の状況 (北東から) | |
| 写真 33 R2-4tr 土塁断ち割り状況 (東から) | |
| 写真 34 R2-4tr 土塁断ち割り南壁断面 (スケールあり) | |
| 写真 35 R2-4tr 土塁断ち割り南壁断面 | |
| 写真 36 R2-4tr 土塁断ち割り北壁断面 (スケールあり) | |
| 写真 37 R2-4tr 土塁断ち割り北壁断面 | |
| 写真 38 R2-4tr 列石検出状況 (北側面から) | |
| 写真 39 R2-4tr 列石検出状況 (正面から) | |
| 写真 40 R2-4tr 列石検出状況 (上面から) | |
| 写真 41 北東部城壁 (R2-4tr 周辺) 遠景 R2 年度伐採前 | |
| 写真 42 北東部城壁線 (R2-4tr 周辺) 遠景 R2 年度伐採後 | |
| 写真 43 北東部城壁 1 | |
| 写真 44 北東部城壁 2 | |
| 写真 45 北東部城壁 3 | |
| 写真 46 R2-1tr 出土土器 (縮尺: 約 1/2) | |
| 写真 47 R2-2tr 出土土器 (縮尺: 約 1/2) | |

第1章 発掘調査の目的と経過

第1節 発掘調査の目的

今回の発掘調査は、西条市教育委員会が平成27年度に策定した史跡永納山城跡保存整備基本計画（以下、基本計画）及び平成30年度に作成した史跡永納山城跡保存整備基本設計（以下、基本設計）に基づき整備を実施していく上で、遺構の確認が必要となった地点に対して行った。

調査地点は内部ゾーンと北東部ゾーンであり、基本計画で整備方針はそれぞれ以下のように示されている。

1 整備方針

内部ゾーン：中央部に位置し、各ゾーンへの接続地点、遠足等長時間滞在の拠点としての整備（便益施設等の整備）を目指す。

北東部ゾーン：周囲の地理的環境を踏まえた上で、遺跡を把握できる整備を目指す。

登り口付近の城壁については、山に登ることが困難な利用者に対しても城壁を見学できる整備を目指す。その他の城壁については、遺構の保全を第一とする。

2 調査地の現状

内部ゾーンは、平成22年度の調査によって南東部尾根から緩やかに下った斜面地で鍛冶関連遺構を検出しているが、その他の遺構は確認できていない。また、中央の谷筋では、平成20年度に調査が実施されているものの遺構の存否は不明であり、基本設計で便益施設設置箇所と定めた地点は未調査であった。

北東部ゾーンは、遺跡発見当初から比較的長区間で城壁の存在が確認されていて、これまでの調査で版築土塁が検出されている。しかし、基本計画で城壁整備地点と位置付けた北部登り口付近の城壁は、列石が良好に残存しているものの、これまで城壁構造に対する調査は行われていなかった。

3 目的

今回の調査は、このような状況を踏まえた上で、以下の点を主な目的として実施した。

- ① 内部ゾーン：遺構の存否を明らかにするとともに、便益施設工事が遺構に与える影響について確認すること。
- ② 北東部ゾーン：城壁の構造を明らかにし、整備に必要な情報を得ること。

第2節 調査組織

調査組織は、以下のとおりである。なお、西条市では永納山城跡の保存整備に伴い史跡永納山城跡保存整備検討委員会（以下、保存整備検討委員会）を組織しているため、今回の調査に際しても同委員会の助言を得ることとし、調査に特化した委員会は設置していない。

史跡永納山城跡保存整備検討委員会

区分	氏名	専門	所属	
委員	学識 経験者	下條 信行（委員長）	考古学	愛媛大学名誉教授
		亀田 修一	考古学	岡山理科大学教授
		江崎 次夫	植生（環境緑化学）	愛媛大学名誉教授
		前川 歩	史跡整備	奈良文化財研究所主任研究員
		井口 梓	観光まちづくり／観光地理学	愛媛大学准教授
	市民 代表	白石 成二	古代史／市民代表	西条市文化財保護審議会委員
		山田 裕之	市民代表	小学校教諭
		森川 護（副委員長）	市民代表	永納山古代山城跡の会会長
		森川 むつ子	市民代表	永納山古代山城跡の会会長

オブザーバー

文化庁文化資源活用課、愛媛県教育委員会文化財保護課、今治市教育委員会文化振興課、歴史環境計画研究所

事務局

役 職	令和2年度	令和3年度
教 育 長	伊藤 隆志	伊藤 隆志
管 理 部 長	三好 昭彦	三好 昭彦
管 理 部 副 部 長	高橋 壯典	-
社 会 教 育 課 長	安倍 和紀	前谷 浩教
社 会 教 育 課 主 幹	岩崎 晃彦	-
社会教育課副課長兼歴史文化振興係長	伊藤 敏昭	伊藤 敏昭
歴 史 文 化 振 興 係	渡邊 芳貴	渡邊 芳貴
歴 史 文 化 振 興 係	岡島 俊也	岡島 俊也
歴 史 文 化 振 興 係	鈴木 圭	鈴木 圭

作業員

青野 浩三・江原 忠明・梶川 末勝・榎 重信

第3節 発掘調査の経過

1 令和2年度

調査期間：令和2年5月13日～令和3年3月8日

事業実施地区：内部ゾーン、北東部ゾーン

現状変更許可：令和2年4月17日付け 元受庁財第4号の1993（発掘調査）

（1）トレンチの名称

今回の調査では、トレンチを4か所に設置した。各トレンチの名称は、頭に調査年度（R2）を付し、内部ゾーンの標高の高いトレンチからR2-1tr・R2-2tr・R2-3trとし、北東部ゾーンのトレンチをR2-4trとした。

（2）内部ゾーンの調査

5月13日（水）、内部ゾーンの調査予定地（R2-1tr～R2-3tr）周辺と作業道付近の草刈りに着手し、現地作業を開始した（写真1-1）。最初の調査地であるR2-3trは、永納山城跡の中心部に位置し、中央の谷に隣接する。トレンチは、トイレ設置予定地に南北に長軸をとり3×7mの規模で設定した。当箇所は史跡整備に伴う用地公有化直前まで家屋があった場所で、表土から約15cm下で家屋の基礎と考えられるコンクリートが現れた。その下には崩落土である花崗岩類の砂礫層が厚く堆積し、現地表面から約1.2m下で地山を検出し、永納山城跡に伴う遺構が存在しないことを確認した。掘り下げ停止後は、写真撮影、図面作成を行い26日（火）に本トレンチの調査を終了した。なお、表土及び崩落土の掘り下げは重機と人力を併用した。これは後述するR2-1tr・R2-2trも同様である。

27日（水）からはR2-1tr・R2-2trの調査に移行した。両トレンチは四阿整備予定地であり、R2-3trから南東部尾根に向かい小さな谷を上がっていくと開ける緩斜面に位置する。トレンチの規模は共に5×5mである。R2-1trは、表土下に厚い崩落土の堆積が見られたが、R2-3trとは様相が異なり、細礫から巨礫までを含む土砂であり、過去の斜面崩落の激しさを物語っていた。調査は、崩落土中に混入した人力で動かすことのできない巨礫を重機でトレンチ外へ吊り上げつつ、慎重に進めた。その結果、現地表面から約1.3m下で黒褐色土層を検出し、その下に暗褐色土層が広がることを確認した。層の時期を特定できる遺構、遺物は確認できなかったが、土壌化が進んでいた点やこれまでの調査成果との比較により、これらの層が過去のある段階での地表面の可能性が高いと判断した。また、検出面は工事の影響深度より下であることから、この層で掘り下げを停止し、写真撮影、図面作成を行い、6月12日（金）に調査を終了した。

15日（月）からは、R2-2trの調査準備（周辺の樹木伐採、草刈り、トレンチ設定）に着手し、17日（水）に調査を開始した。梅雨ということもあり、22日（月）には週末に降り続いた雨の影響でR2-1trが水没し、

その復旧に時間を要したが、調査開始後間もなかったR2-2trでは大きな被害はなかった。

R2-2trは、現地表面から約1.2m下で土壌化した層を検出し、この層を精査したところトレンチ南東半部で直径20～30cmを中心とした礫の広がりを確認した。また、この礫の広がりを境に北西部と南東部で土にも違いがあり、これらの礫は何らかの遺構に伴う可能性も考えられた。その後慎重に調査を進めたが、それが人為的なものである確証を得ることはできなかった。なお、礫検出面は工事による掘削の影響を受けないことから、全面的な掘り下げは実施せず、東壁沿いでの断ち割りにより層の堆積状況を確認するにとどめた。本トレンチの調査は、天候や他の業務との関係で現場が中断することもあったが、7月8日(水)に終了した。

(3) 北東部ゾーンの調査

7月15日(水)から北東部ゾーンの調査準備に入り、調査機材の運搬や、R2-4tr設置予定地周辺の樹木伐採、草刈りといった準備作業を行った。トレンチは尾根に直交するように東西に長軸をとり1.5×7.2mの規模で設定した。トレンチの掘り下げは21日(火)から開始し、作業はすべて人力で行った。また、トレンチ調査と並行して、これまで詳細な図化を行っていなかった北東部列石の測量にも着手した。このように北東部では、①R2-4trでの城壁構造確認、②周辺の列石測量、そして③これらを実施する上で影響のある樹木伐採、と3つの作業を並行して行った。

R2-4tr周辺は、尾根頂部付近が近代以降の削平を受けているため、城壁もその影響を受けている可能性があった。一方で、列石の残存状況は、北東部城壁の中でも良好であり、尾根に沿って大型の列石が並んでいた。このような状況から、調査前はH23-1trで確認されたような版築土塁が築かれているのではないかと期待された。しかし、調査を開始すると、その実態は当初の想定と異なったものであることが明らかとなった。表土及び薄く堆積した崩落土を除去すると、列石の上には土塁と考えられる盛土を検出した。しかし、それはこれまで他のトレンチで見えてきた版築土塁に比べると、粗く締まりのないものであった。また、尾根頂部付近では比較的浅い面で花崗岩風化土層を検出した。

この層の性格については、地山の可能性もあり、土塁の一部であるどうか判断に迷うところであった。そこで、この段階で一旦記録をとり、8月6日(木)から土の堆積状況を確認するためにトレンチ北半部の断割



写真1-1 調査前の草刈り作業 (R2-3tr周辺)



写真1-2 重機による崩落土除去 (R2-1tr)



写真1-3 トレンチ精査 (R2-2tr)



写真1-4 調査前のR2-4tr(東から)



写真1-5 R2-4tr 土層剥ぎ取り作業



写真1-6 保存整備検討委員会での検討風景



写真1-7 R2-4tr 埋め戻し状況
(表面は植生土のうで保護している)

りを開始した。その結果、列石上部の土は粗い単位で積まれている盛土であることを確認し、当初地山かと想定した尾根頂部付近の花崗岩風化土もこの粗い盛土の一部であることが明らかとなった。このような土塁は、永納山城跡の中で類例が少ないため、土塁の状況を後日検証できるように、9月23日(水)・24日(木)に土層の剥ぎ取りを実施した(写真1-5)。

列石の測量は、R2-4trの南北両サイドの計約50mの区間で行い、7月30日(木)に作業を終えた。列石の平面的な位置を記録できたことは、今後の整備や活用に役立つものと思われる。樹木伐採は、R2-4trと周辺の列石との位置関係を視覚的に把握できるよう断続的に実施し、トレンチ調査完了に合わせて一旦終了した。

これらの作業を終えた後、9月10日(木)にドローンによる空中写真撮影を行い、地上から撮影が困難なカットでの写真記録を残した。

なお、調査期間中の8月19日(水)には、保存整備検討委員会の下條信行委員長に現地指導を受けた。また、10月8日(木)には保存整備検討委員会開催に合わせ、現地協議を行った。当日は太平洋上を進む台風14号の影響による大雨、強風の中での視察となったが、北東部城壁を中心に調査成果を確認した(写真1-6)。当日参加できなかった亀田修一委員には、12月23日(水)に別途現地指導を受けた。これらの委員会及び現地指導では、多岐にわたる助言をいただいたが、特に版築ではなく粗い盛土による土塁の意義付けについて、永納山城内での土塁構造の検討はもとより、その起源についても検討していく必要性が指摘された。

調査終了後は植生土のうを用いてトレンチを埋め戻し、原状に復した(写真1-7)。

第2章 史跡の概要と現状

第1節 指定の概要

1 指定説明

- ・ 指定名称：永納山城跡（えいのうさんじょうあと）
- ・ 所在地：愛媛県西条市河原津、楠、今治市孫兵衛作
- ・ 指定面積：407,034.77 m²（西条市：390,834.77 m²・今治市：16,200.00 m²）
- ・ 指定理由：ア 基準 「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」（昭和26年5月10日文化財保護委員会告示第2号）における「史跡 二 都城跡、国郡庁跡、城跡、官公庁、戦跡その他政治に関する遺跡」
 イ 説明 愛媛県に所在する7世紀後半頃築造の古代山城跡。絶壁状に切り立つ岩盤を巧みに利用し、列石と土塁による外郭線を構築する。対外関係が緊張した時代に瀬戸内海防衛の一翼を担い、畿内地方への侵攻を食い止める目的で築造された可能性が高く、7世紀の対外関係を示す遺跡として重要である。
- ・ 官報告示：平成17年7月14日 文部科学省告示第101号
 平成19年7月26日 文部科学省告示第109号（追加指定）
 平成29年2月9日 文部科学省告示第13号（追加指定）

2 史跡の範囲とその構成

史跡指定地の構成は表2-1に、指定範囲、土地所有区分は図2-1、図2-2に示すとおりである。

表2-1 史跡指定地の構成

所在地	地 籍	筆数(筆)	面積(m ²)	所有者
西条市	西条市河原津乙4-1, 乙4-4, 乙4-7, 乙4-15, 乙4-16, 乙4-18, 乙5-1, 乙5-27, 乙5-32, 乙7-4, 乙7-6, 乙7-8, 乙7-13, 乙7-16, 乙7-29, 乙7-40, 乙7-41, 乙7-42, 乙7-43, 乙7-44, 乙7-45, 乙7-46, 乙7-47, 乙7-49, 乙7-50, 乙7-51, 乙7-52, 乙7-53, 乙7-55, 乙7-56, 乙7-57, 乙7-58, 乙7-60, 乙7-61, 乙7-63, 乙7-65, 乙7-68, 乙7-69, 乙7-71, 乙7-72, 乙7-73, 乙7-74, 乙7-75, 乙7-76, 乙7-78, 乙7-79, 乙7-80, 乙7-81, 乙7-82, 乙7-84, 乙7-86, 乙7-88, 乙7-90, 乙7-91, 乙7-92, 乙7-93, 乙7-95, 乙7-101, 乙7-102, 乙7-103, 乙7-104, 乙7-105, 乙7-106, 乙7-108, 乙7-109, 乙7-110, 乙7-111, 乙7-112, 乙7-113, 乙7-114, 乙7-115, 乙7-116, 乙7-117, 乙7-118, 乙7-119, 乙7-120, 乙7-122, 乙7-123, 乙7-124, 乙7-125, 乙7-126, 乙7-127, 乙7-128, 乙7-135, 乙7-136, 乙7-137, 乙7-138, 乙7-145, 乙7-150, 乙7-151, 乙7-152, 乙7-153, 乙7-155, 乙7-156, 乙7-159, 乙7-157, 乙7-158, 乙7-169, 乙7-170, 乙7-171, 乙7-172, 乙7-173, 乙7-178, 乙7-197, 乙7-201, 乙7-203, 乙7-237, 乙7-243, 乙7-244, 乙99-1, 乙100	111	367,088.53	市有地
	東予森林計画区永納山国有林 1060 林班い小班、乙7-153に南接する水路	2	23,432.00	国有地
	西条市河原津乙7-225	1	314.24	県有地
	小 計	114	390,834.77	
今治市	松山・今治森林計画区医王山国有林 1058 林班ろ2 小班	1	16,200.00	国有地
	小 計	1	16,200.00	
合 計		115	407,034.77	

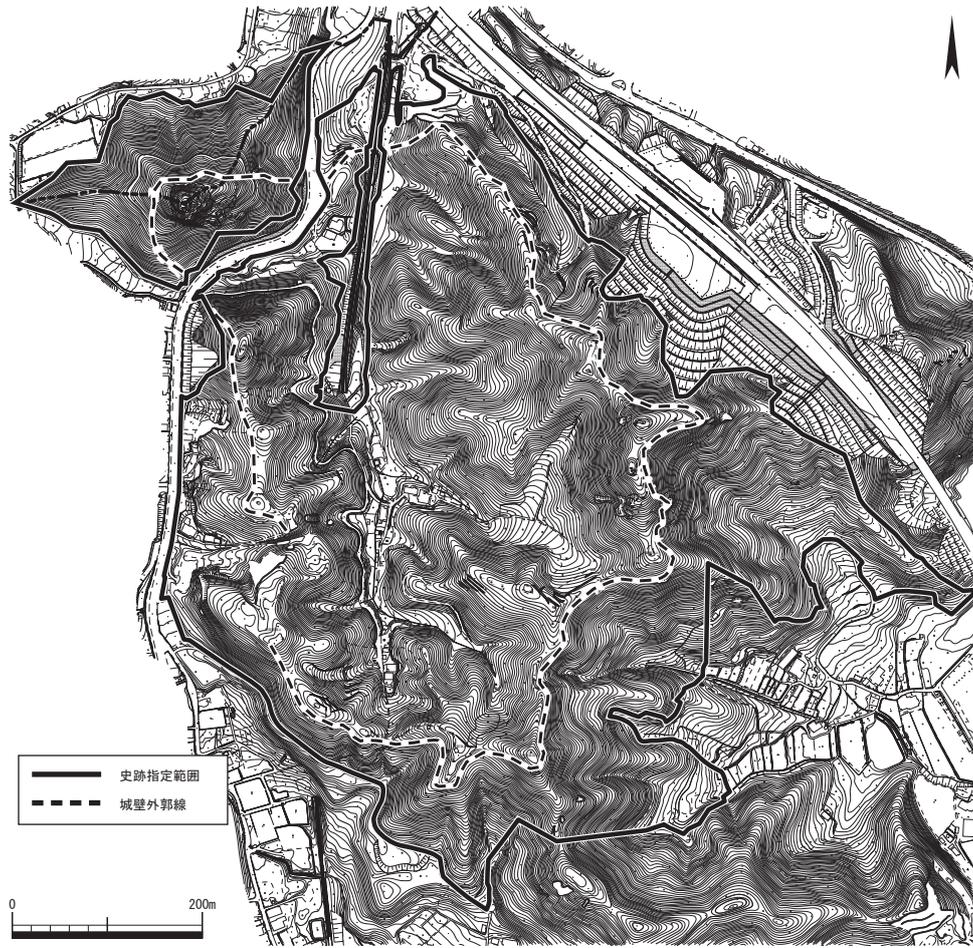


図2-1 永納山城跡 史跡指定範囲図(S=1/8000)

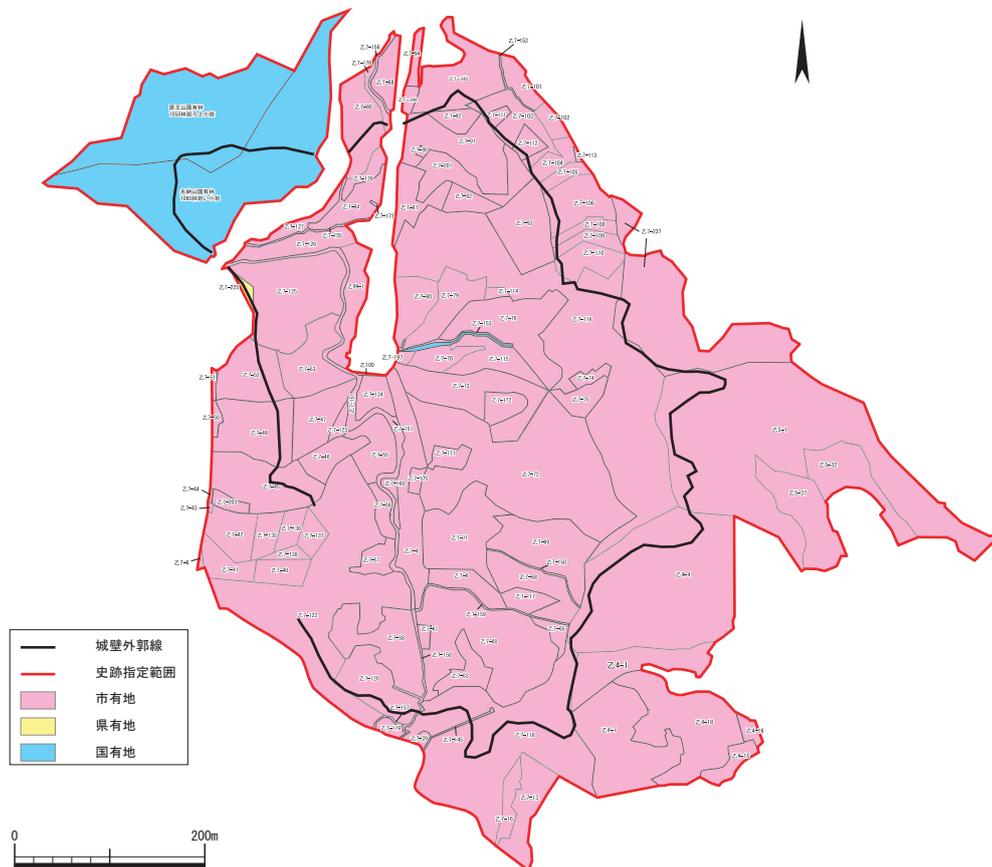


図2-2 土地所有状況図(S=1/8000)

第2節 永納山城跡の概要

1 地理的環境

永納山城跡の地理的環境を広範囲で捉えると、東西約450kmに及ぶ瀬戸内海の中南部に位置する。朝鮮半島から海を渡り関門海峡を抜け瀬戸内海に至ると、そこには大小多数の島が広がり、多くの海峡・水道・瀬戸が存在する。瀬戸内地方は、これらによっていくつもの小地域に分けられ、永納山城の所在する瀬戸内中部には島の密度の特に高い芸予諸島が海の関所のように存在する。また、この周辺の潮流は複雑な様相を呈し、芸

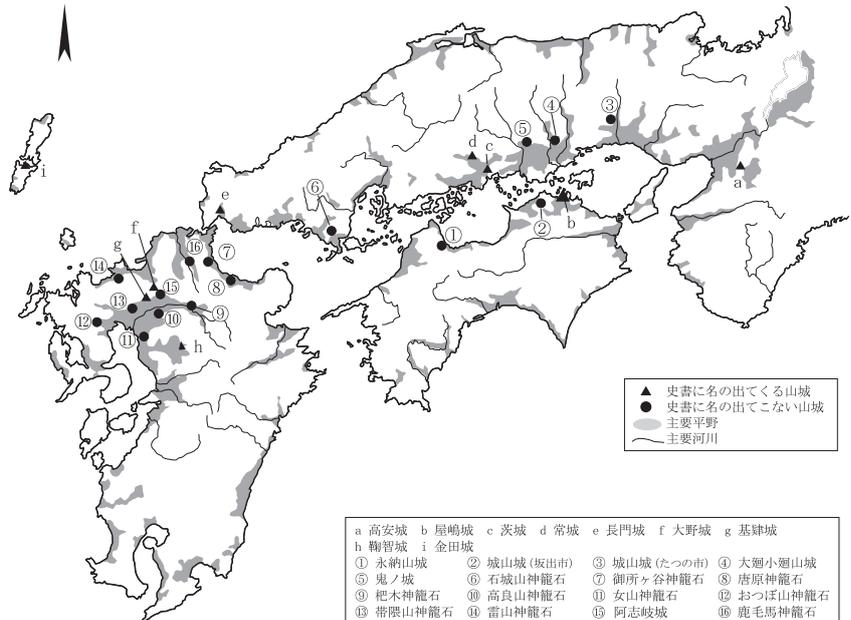


図2-3 古代山城分布図

予諸島と高縄半島によって分断される斎灘と燧灘をつなぐ来島海峡は、古くから瀬戸内海の交通・軍事等の要衝であり、最大の難所となっている。現在では本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」がこれらの島々を結んでおり、この愛媛県側の出発点となるのが高縄半島であり、永納山城はその付け根に位置する。

次に陸地部に目を向けると、永納山城の南方眼下には、県下第二の広さを誇る道前平野が広がる。当平野は、中山川や大明神川等の河川からなる典型的な沖積平野であり、平野中央部から北部にかけては古くから人々の活動痕跡が見受けられる。さらに、北方には当時の国府が所在した今治平野を望み、芸予諸島の一部やその向こうに広がる斎灘も見渡すことができる。また道前平野の沿岸部は、当平野を形成した河川から流れ出る土砂によって、長い年月をかけ遠浅の海や干潟が形成されてきた。現在、海岸線は江戸時代以降に行われた干拓や開発により東側に移動し、当時の姿は残していない。しかし、永納山山頂に立つと正面には海が開け、足元を見下ろすとふもとは現在も入江状を呈しており、すぐ眼下に海を見渡す場所に築城されていたであろう永納山城の姿がさらに鮮明に浮かびあがる。

中・四国地域に築かれた古代山城は瀬戸内海沿岸に点在し、これらは瀬戸内海をその両岸から挟み込むように各重要地域を見据える要衝に築かれたとも捉えうる。中でも永納山城が瀬戸内海に極めて近接している点、瀬戸内海を西から東に向け進んできた場合、最大の難所を抜けた直後の死角的な位置に存在している点は特徴的であり、永納山城がまさに海を意識した山城であったことを示している。

2 歴史的環境

永納山城跡周辺では、主に縄文時代以降に人々の活動の痕跡が認められ、縄文時代後期に入ると永納山の南山麓から世田山麓にかけて、六軒家遺跡群・世田山麓遺跡群等の遺跡が分布する。

弥生時代には周辺の遺跡数は減少するが、遺跡の分布範囲は平野全体に広がり、中期以降にその数が増加する。久枝遺跡や新池・小池遺跡の調査では、地域の拠点的作用を果たした集落の様相の一端が明らかとなった。また、近年は弥生時代前期の調査例も増え、成福寺Ⅷ遺跡では磨製石剣が出土している。

次に永納山城築城の前段階である古墳時代であるが、遺跡数をみると前期、中期は少なく後期以降に集中する。まず集落遺跡では、永納山城跡の約1.5km南に位置する長網Ⅰ遺跡・長網Ⅱ遺跡、福成寺遺跡等で後期の建物跡が確認された。特に長網Ⅱ遺跡2次調査では、鉄生産に関わる多量の遺物出土し、大規模集落の中核部としての機能が想定されている。一方、墓域は、永納山の東丘陵に位置する永納山東Ⅰ遺跡・Ⅱ遺



写真2-1 永納山城跡遠景(南から)



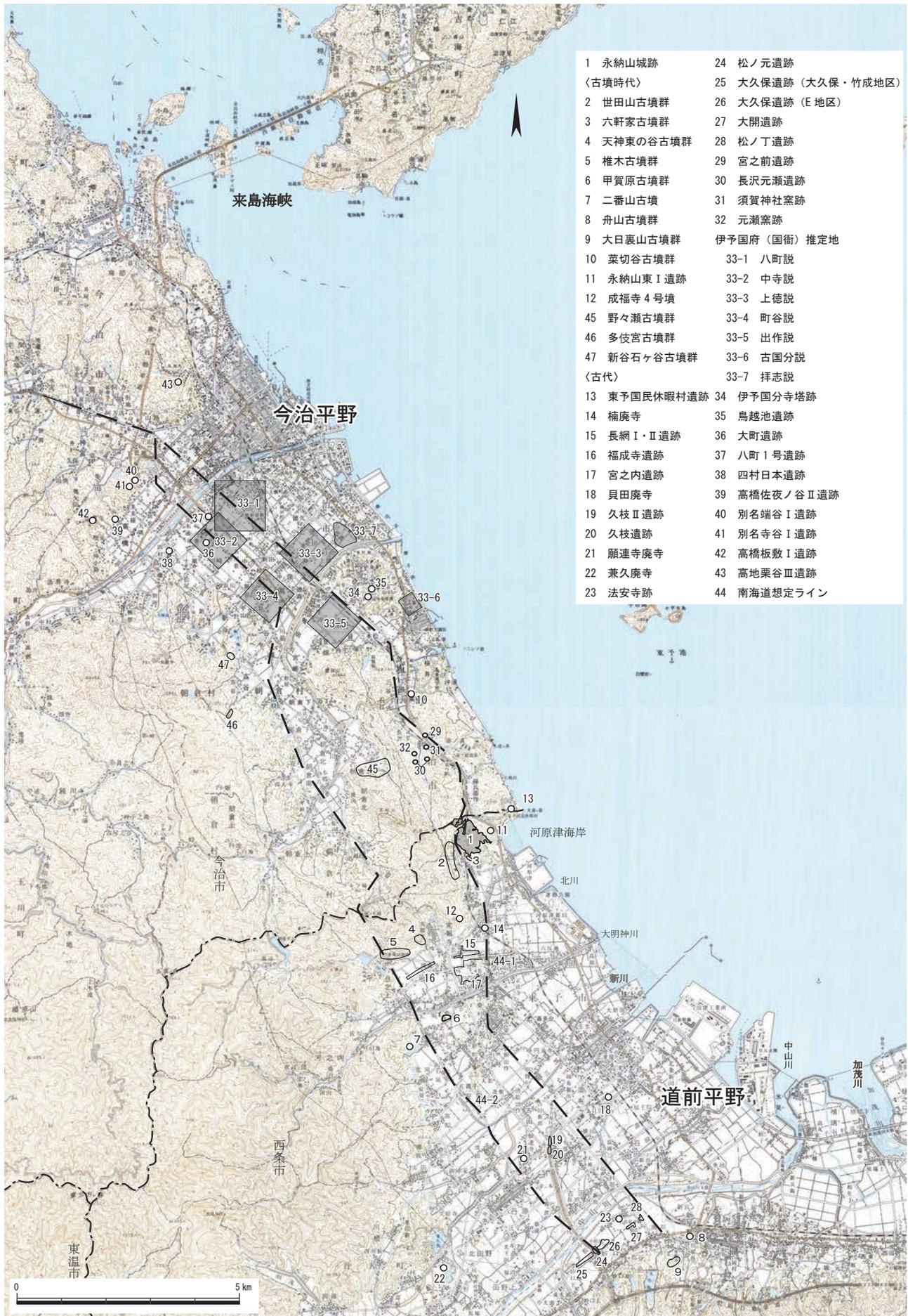
写真2-2 永納山城跡遠景2

昭和22年 米極東空軍撮影の空中写真を使用。一部加筆。

跡で、前期から中期にかけての土坑墓・石槨墓が確認されている。また、永納山城の南1.8kmのところの位置する成福寺4号墳は古墳出現期の墳墓とされ、これまで不明な部分が多かった平野北部の前半期の様相も徐々に明らかになりつつある。中期には永納山周辺に目立った遺跡は確認されていないが、後期に至ると世田山古墳群・六軒家古墳群などの群集墳が丘陵沿いに数多く築造される。さらに永納山の南を流れる北川や大明神川周辺の平野部にも甲賀原古墳群こうかばらなど多くの群集墳が分布する。古墳の中には後世の開発により消滅したものもあるが、その数の多さや残された副葬品などから、当地で在地豪族が成長していたことを推測できる。これらの古墳に埋葬された人々の子孫が、後に永納山城築城に関わった可能性は十分考えられる。

永納山城が築かれた古代は、道前平野すまひくわむらに周敷・桑村の2郡が置かれ、国府の所在した今治平野や南海道との関連で当地域の重要性が以前から指摘されている。そこで、少し広域的に遺跡の広がりを確認しておきたい。まず、道前平野を概観すると、永納山城跡から約7km南に位置する久枝Ⅱ遺跡では、8世紀代の官衙関連施設と考えられる建物跡や柵列が確認され、周敷郡の郡衙の可能性が指摘されている。さらに中山川の右岸に位置する松ノ元遺跡では、官道との関連性が指摘される道路遺構の調査が行われている。道前平野を通過する南海道の路線には主に2説あり、いまだ確定されていないが、永納山城の西側麓を抜けるルートが有力視されている。なお、市内で発掘調査によって道路遺構が確認された例は、現在のところ松ノ元遺跡のみである。周辺では、一般国道11号小松バイパスに伴う大規模な発掘調査が実施された結果、先の道路遺構周辺の集落の状況も明らかになり、8世紀代における官衙関連施設と一般集落からなる景観の変遷かんがが復元されている。なお、中山川の右岸、先述の松ノ元遺跡の傍には、県内最古の寺院とされる法安寺跡があり、平野全体が広範囲に開発されていた様子をうかがえる。また、大明神川の左岸に位置する長網Ⅰ・長網Ⅱ遺跡では、掘立柱建物跡や大溝が検出されている。さらに平成27・28年度に同遺跡の南側で実施した国営ほ場整備に伴う試掘調査(宮之内遺跡)では、赤色塗彩土師器や刻書須恵器といった古代の遺物が出土している。詳細は今後の本調査に委ねられるが、長網Ⅰ・長網Ⅱ遺跡を含めた大規模な遺跡の広がりも考えられる。

一方、古代の今治平野には越智郡が置かれ、伊予国府や国分寺等が存在した。国府の所在はいまだ確定していないが、推定地周辺の一つである八町1号遺跡では官衙的と評価される遺物が出土している。また、永



- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1 永納山城跡
(古墳時代) | 24 松ノ元遺跡 |
| 2 世田山古墳群 | 25 大久保遺跡 (大久保・竹成地区) |
| 3 六軒家古墳群 | 26 大久保遺跡 (E地区) |
| 4 天神東の谷古墳群 | 27 大開遺跡 |
| 5 椎木古墳群 | 28 松ノ丁遺跡 |
| 6 甲賀原古墳群 | 29 宮之前遺跡 |
| 7 二番山古墳 | 30 長沢元瀬遺跡 |
| 8 舟山古墳群 | 31 須賀神社窯跡 |
| 9 大日裏山古墳群 | 32 元瀬窯跡 |
| 10 菜切谷古墳群 | 伊予国府 (国衙) 推定地 |
| 11 永納山東 I 遺跡 | 33-1 八町説 |
| 12 成福寺 4 号墳 | 33-2 中寺説 |
| 45 野々瀬古墳群 | 33-3 上徳説 |
| 46 多伎宮古墳群 | 33-4 町谷説 |
| 47 新谷石ヶ谷古墳群 | 33-5 出作説 |
| | 33-6 古国分説 |
| | 33-7 拝志説 |
| 13 東予国民休暇村遺跡 | 34 伊予国分寺塔跡 |
| 14 楠麿寺 | 35 鳥越池遺跡 |
| 15 長網 I・II 遺跡 | 36 大町遺跡 |
| 16 福成寺遺跡 | 37 八町 I 号遺跡 |
| 17 宮之内遺跡 | 38 四村日本遺跡 |
| 18 貝田麿寺 | 39 高橋佐夜ノ谷 II 遺跡 |
| 19 久枝 II 遺跡 | 40 別名端谷 I 遺跡 |
| 20 久枝遺跡 | 41 別名寺谷 I 遺跡 |
| 21 願連寺麿寺 | 42 高橋板敷 I 遺跡 |
| 22 兼久麿寺 | 43 高地栗谷 III 遺跡 |
| 23 法安寺跡 | 44 南海道想定ライン |

図2-4 永納山城跡周辺地図(S=1/120000)

国土地理院発行5万分の1地形図「松山北部」「今治西部」「今治東部」「西条」を使用。一部加筆

納山城の北に位置する平野南西部の丘陵には、8世紀中葉から後半に操業したとみられる須賀神社窯跡や元瀬窯跡がある。そして、その周辺では、窯業に携わった工人と密接な関係があると考えられる長沢元瀬遺跡や宮ノ前遺跡が調査されている。一方、北西部の丘陵では四国最古の製鉄遺跡である高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡、そして高橋板敷Ⅰ遺跡、別名寺谷Ⅰ遺跡等で鍛冶遺構が多数確認されており、今治平野における古代の鉄生産の様相が明らかになりつつある。これらの遺跡と永納山城跡との直接的な関わりは、現段階では明らかでないが、伊予国府を中心とした東予地域の発展を考える上で大変興味深い。

なお、中世の動乱期には道前平野も幾度か戦場となり、丘陵部の要所には山城がいくつも築造されるようになり、永納山の西にそびえる世田山には南北朝期に世田山城が築かれ、2度の大きな合戦が行われた。

3 地形的特徴 (図2-5)

永納山城は、現在は独立山塊となっている2つの山塊を城域として取り込む。遺跡の中心となるのは永納山と呼ばれる山塊であり、その大きさは東西780m・南北970mで、中央には北へ向け開く大きな谷が存在する。

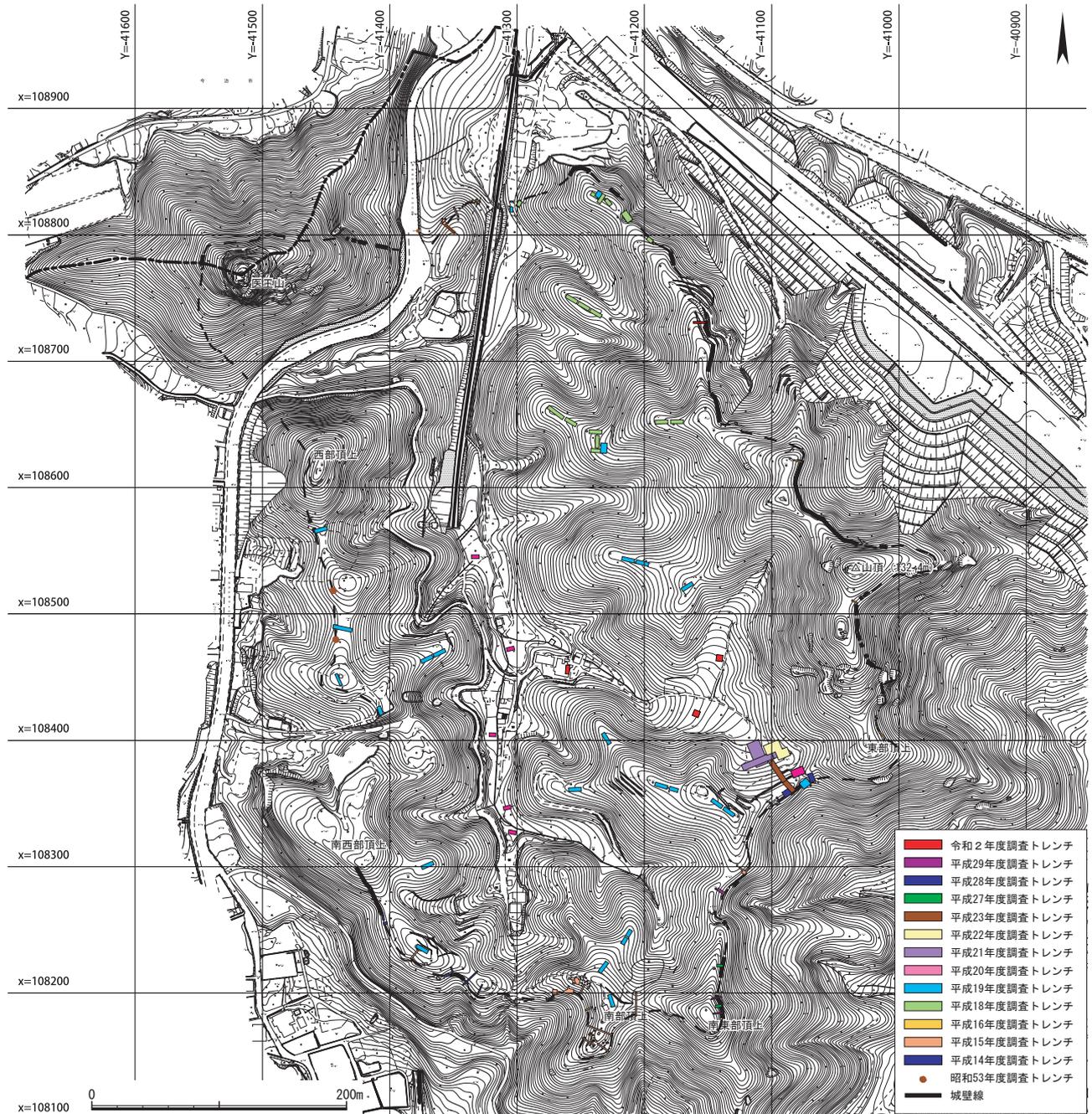


図2-5 永納山城跡調査位置図 (S = 1/5000)

もう1つの山塊は、北西部に位置する医王山である。

永納山の高さは、山頂で標高132.4mを測る。城域内には北西部の医王山を含めると7か所の頂上があり、山の稜線はこれらを結ぶように起伏を持ちながら連なる。その地形的特徴を見ていくと、南西部から南部、東部にかけては尾根筋から尾根斜面にかけ岩盤の露出が顕著であり、中には垂直に切り立った露岩により絶壁となる場所もみられる。これらに対し、北東部や北部は永納山山頂から尾根が比較的緩やかな傾斜で延び、北の谷へ向かい下っていく。次に西部は多少の起伏はあるものの、尾根は比較的緩やかに延びる。しかし、この西部頂上から北西にかけては、医王山方向へ向かい尾根が急傾斜で下っていく。永納山と遺跡北西にそびえる医王山との間には、現在県道孫兵衛作壬生川線が通過しているが、その下に流れる小川の存在等から当時は小さな谷によって分けられていたものと想定できる。なお、医王山は標高131mを測り、永納山山頂とほぼ同じ高さである。山肌には各所に岩盤が露出し、特に中腹より上ではこれらの岩盤が垂直に切り立つ場所もあり、まさに「岩山」という言葉が当てはまる。

4 発見から今回の事業に至るまでの経緯

永納山城跡は、記録上では昭和52年4月、当時の東予市文化財専門委員の遺跡分布調査中に発見され、同年7月から53年2月（1次調査）、53年5月から54年3月（2次調査）と二次にわたる確認調査が実施された。調査に際しては調査団を設置し、奈良国立文化財研究所（現：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）及び愛媛県教育委員会の指導の下、遺構の確認が行われた。調査目的は遺跡の内容把握及び範囲の確定であり、調査の結果、列石・土塁を基本とした城壁が巡らされる古代山城であることが明らかとなった。この時点で城壁の外郭線の総長は約2.5kmであることが報告され、外郭線上には水門・城門といった遺構の存在も推定されている。これらの調査終了段階で一部の市民から史跡指定を目指す声があがり、市教育委員会も指定に向けた作業を進めたが、諸般の事情によりこの時点での史跡申請は実現しなかった。

申請断念とともに永納山城跡に対する調査や保存への動きもしばらく停滞していたが、時代が昭和から平成に移り史跡指定への気運が再燃することとなる。その背景には、高度経済成長による開発が一段落し、地域の文化・文化財に対する市民の関心が高まったことや、市の方針にも貴重な文化財の保存・整備により、地域の活性化を図る動きがあった。また、遺跡の価値を見直すという点では、平成11年度から3年をかけ、東予市内遺跡詳細分布調査が実施されている。遺跡分布状況の詳細な把握は、文化財の保護と開発行為との共存のために欠かすことができない。調査は（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター（現：（公財）愛媛県埋蔵文化財センター）等の協力を受け、多くの市民ボランティアの参加を得て実施された。その結果、市内における遺跡包蔵地はそれまでの約2倍となる315件（旧東予市）に増加し、地域の歴史的環境を再認識することとなった。また、平成11年度には詳細分布調査の一環として永納山城内の試掘調査も実施され、7か所にトレンチが設定された。この調査では内部遺構に関する明確な手がかりを得ることはできなかったが、現地を踏査する中で、主要な城壁構造である列石と土塁が長距離にわたり続いている状況が再確認され、古代山城の築城当時の姿を現在も良好に残していることが判明した。これらの成果から、市は改めて永納山城跡を重要遺跡と位置付けた。

そこで市では平成14年度から3年計画を立て、永納山城跡の将来的な保存・活用を前提とした範囲確認調査を実施することとした。調査にあたっては「永納山城跡調査指導委員会」を組織し、全体計画を協議した上で現地調査を実施し、その結果、様々な城壁構造が明らかとなった。東予市は平成16年11月に2市2町による合併により西条市となったが、これらの調査成果を踏まえ、平成17年2月4日付で史跡指定申請書を提出した。そして同年5月20日、国の文化審議会で答申が出され、7月14日付で史跡に指定された。これを受け、史跡指定翌年度の平成18年度に史跡整備の土台となる保存管理計画を策定した。また、同年度には、平成16年度段階で指定申請できなかった1筆について、追加指定申請を行い、平成19年7月26日に史跡に追加指定されている。

このような流れで永納山城跡は史跡となり、遺跡の歴史的価値は認められた。しかし、それまでの調査は主に遺跡範囲の確認を目的とした城壁周辺の調査であり、城内施設や城門、水門といった遺構に関しては、その存否さえ不明な状態であった。史跡の適切な保存と活用を行なっていく上で不可欠な遺跡の詳細な内容把握は、指定後の課題として残されていた。

そこで、平成18年度～20年度の3年で遺構確認のための調査を実施し、遺跡の実態解明を目指した。この調査では、北部水門推定地付近で城門の可能性のある遺構を検出する等、多くの成果が上がった。一方で内部施設に関連した調査は、建物跡等の明確な痕跡を確認できないまま最終年度を迎えていた。しかし、最後に設定した南東部の尾根内側緩斜面のトレンチで、過去のある段階の地表面であった可能性の高い土壌化した層を検出した。限られた面積のトレンチ調査であったため、この段階では土層の時期や永納山城との直接的な関係は把握できなかったが、この層が内部施設の確認に向けて重要な手がかりであることは間違いなかった。このような状況を踏まえ、調査指導委員会で今後の方針について協議を行なったところ、トレンチ周辺を拡張し、層の広がりを確認するとともに遺物・遺構の存否を確認する必要があるとの提言を受けた。

この提言を受け、文化庁・愛媛県教育委員会と協議を行い、翌年度以降も調査を継続することとなった。平成21～23年度の調査では、城内の施設に関して特に大きな成果が上がった。平成22年度は、南東部内部の拡張調査で、鍛冶関連の遺構、遺物が検出された。鍛冶遺構の検出は、古代山城では例が少なく、城内での生産活動を考えていく上で重要な成果であった。また、平成23年度には、南東部の尾根でこれまでの調査の中で最も残りの良好な土塁を検出した。

このように調査成果が積み重なっていく中、平成23年度からは史跡用地の公有化事業を開始し、平成29年度で公有化率が100%となった。そして、この公有化が軌道に乗り現地整備の実施にも目途がついた平成26年度に保存整備基本計画策定事業に着手し、平成27年度末に基本計画を策定した。また、基本計画策定と並行して、平成27年～29年度には南東部整備のための情報を得ることを目的に調査を実施し、多様な城壁構造を再確認している。

平成30年度には基本計画の基づき、これらの調査成果を踏まえた上で、基本設計を作成した。今回調査した場所は、基本設計でトイレ、四阿を設置することとした城内部と城壁見学地点となる北東部の城壁である。

《主要参考文献》

- 池尻伸吾他編『別名端谷Ⅰ遺跡・別名端谷Ⅱ遺跡・別名成ノ谷遺跡・別名寺谷Ⅰ遺跡・別名寺谷Ⅱ遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007
- 石貫弘泰編『ツノ谷古墳 新谷石ヶ谷古墳群』（公財）愛媛県埋蔵文化財センター 2021
- 榎部大作編『高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡』今治市教育委員会 2007
- 榎部大作編『高橋板敷Ⅰ・Ⅱ遺跡』今治市教育委員会 2008
- 榎部大作編『高地栗谷Ⅰ・Ⅲ遺跡』今治市教育委員会 2008
- 西条市教育委員会編『永納山城跡 - 平成14年度～16年度調査報告書 - 』2005
- 西条市教育委員会編『史跡 永納山城跡Ⅰ』2009
- 西条市教育委員会編『史跡 永納山城跡Ⅱ』2012
- 西条市教育委員会編『史跡永納山城跡保存整備基本計画書』2016
- 西条市教育委員会編『市内遺跡試掘調査報告書』2020
- 柴田昌児他編『大久保遺跡（大久保・竹成地区・E地区）・大開遺跡・松ノ丁遺跡（1次・2次）』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008
- 土井光一郎他編『永納山東Ⅰ遺跡・永納山東Ⅱ遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2008
- 東予市教育委員会編『永納山城遺跡調査報告書』1980
- 東予市誌編さん委員会編『東予市誌』東予市 1987
- 中野良一編『八町1号遺跡』- 2次調査区 - 今治市教育委員会 1995
- 中野良一他編『長網Ⅰ遺跡 長網Ⅱ遺跡 実報寺高志田遺跡』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2005
- 西川真美他編『長沢元瀬遺跡・長沢二反地遺跡 - 一般国道196号今治道路（湯ノ浦IC～朝倉IC間）埋蔵文化財発掘調査報告書5 - 』（公財）愛媛県埋蔵文化財センター 2018
- 松村さを里他編『世田山4号墳・成福寺Ⅷ遺跡・成福寺3・4号墳・松木池遺跡・長網Ⅰ遺跡2次』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2007
- 三好裕之編『旦遺跡・宮ノ前遺跡・長沢石打遺跡・長沢1号墳・長沢6号墳・二の谷古墳・鉄又古墳群・郷松井西塚古墳 - 一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書 - 』（財）愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000

第3章 発掘調査成果

本章では、第1節で内部調査の成果を、第2節で北東部調査の成果を報告する。

第1節 内部トレンチ調査の成果

1 調査の目的

R2-1～R2-3trは、西条市教育委員会が平成30年度に作成した基本設計で定めた便益施設設置予定箇所に設定した。調査の目的は、遺構の存否確認であり、また遺構が存在した場合は工事による影響の有無を確認することであった。なお、R2-1tr・R2-2trは四阿、R2-3trはトイレ設置予定地点である。

2 トレンチ設置箇所と周辺の地形

永納山城は、城内の中央に南北方向に延び北に開口する谷を有し、その谷を取り囲む尾根の外側斜面に城壁が巡っている。城内側には、この尾根から中央の谷に向い八手状に延びる尾根が派生し、城内は複数の小さな谷状の空間に分けられる。R2-1tr・R2-2trを設定した場所は、南東部尾根から遺跡中央の谷に向かい緩やかに下る斜面地と山頂北側の尾根から城内側に向け下る谷地形が交わる場所であり、城内では最も広大な空間を有する（図3-1・3-2、写真3-1・3-2）。なお、この周辺では、南東部尾根から直線距離で約30m下ったところで、鍛冶関連遺構を検出している。

これらのトレンチ設置箇所から中央の谷に向かう途中で、斜面は南北両側の尾根の張り出しにより一旦す

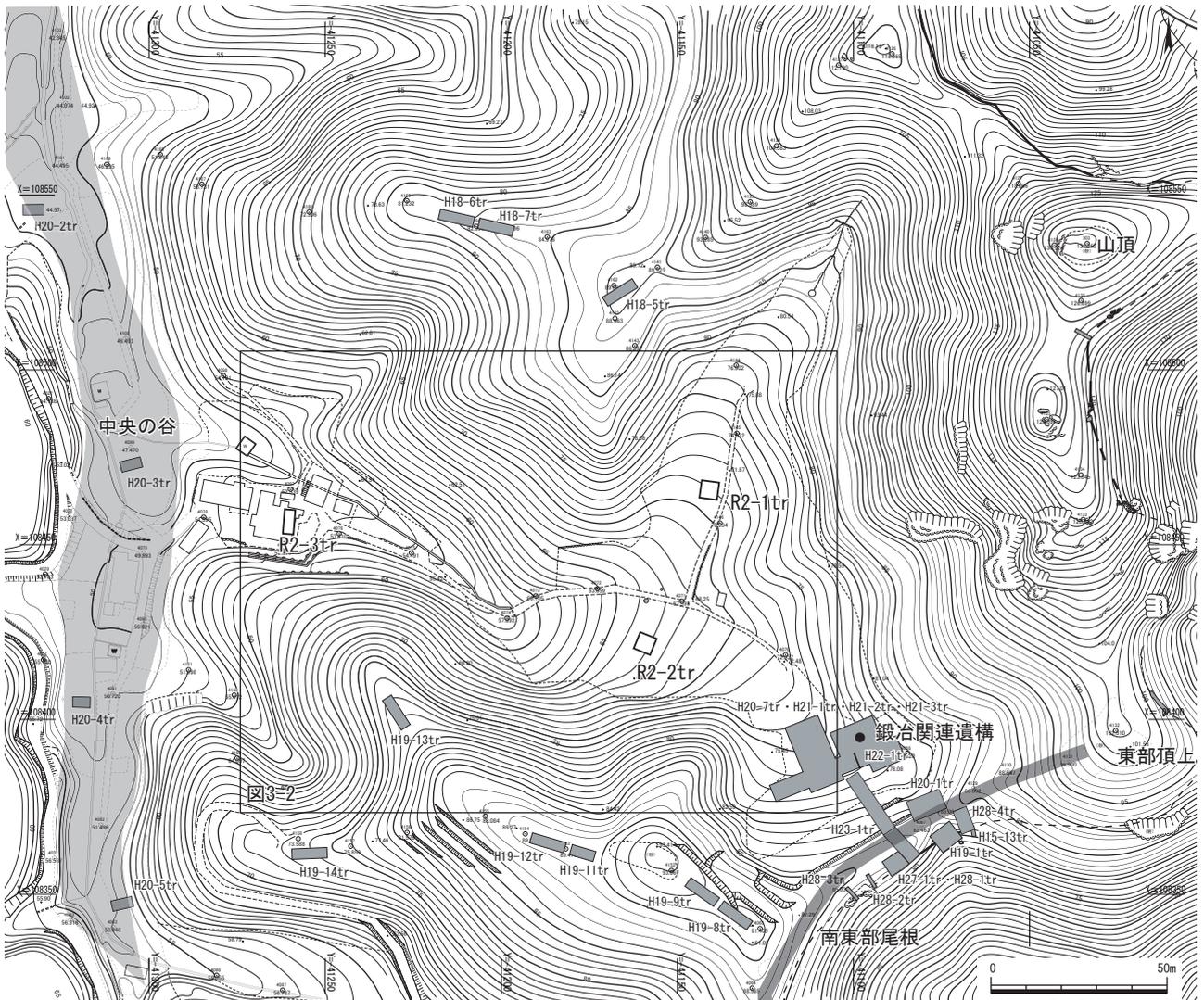


図3-1 R2-1～3 トレンチ位置図 (S = 1/2500)



写真3-1 調査地遠景空中写真(南東から)

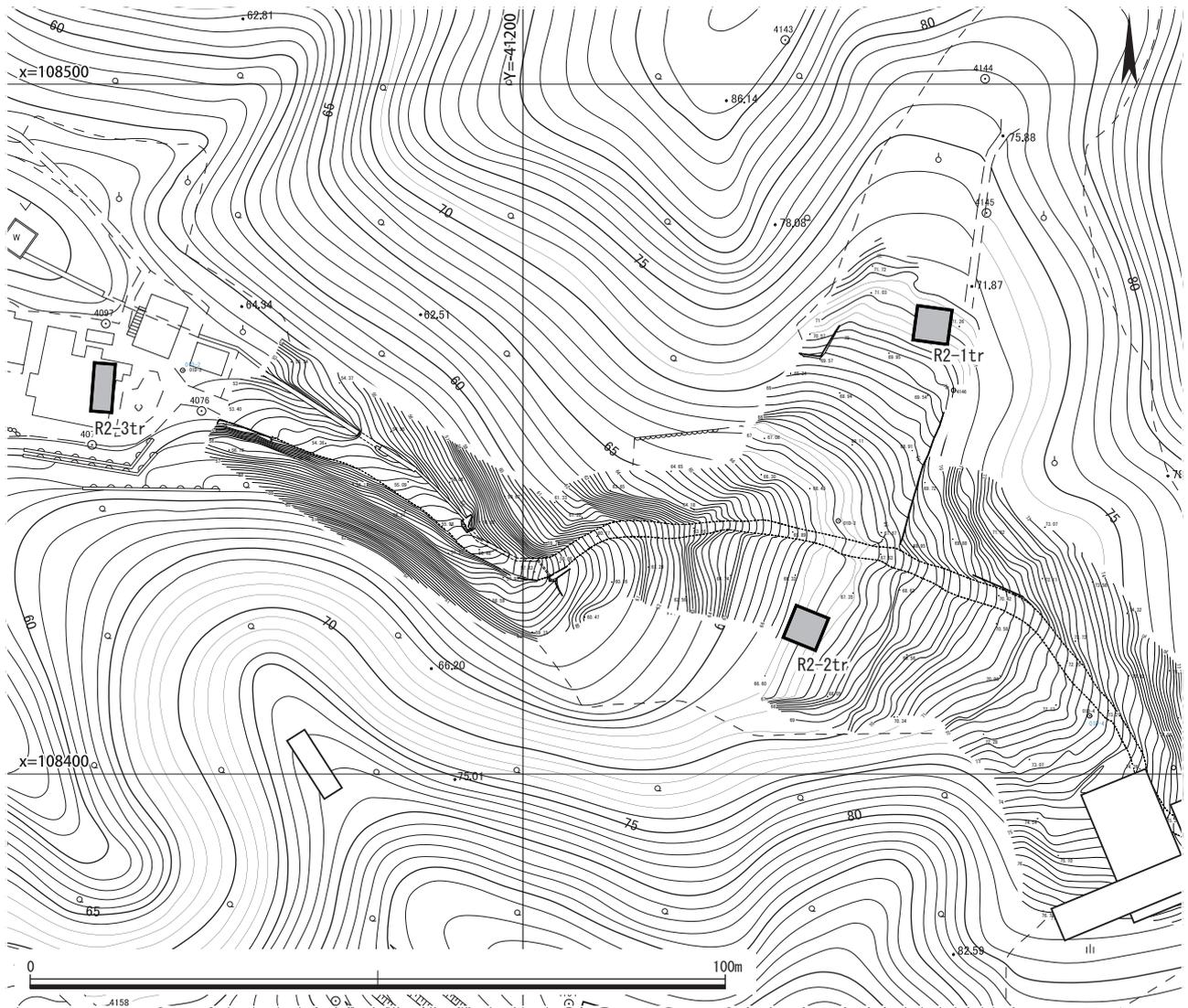


図3-2 調査地周辺地形図 (S = 1/1000)



写真3-2 R2-1・2trと南東部の尾根(西から)



写真3-3 R2-3trからみたR2-2trと南東部尾根(西から)

ぼまった後、中央の谷と合流する。この合流部付近に設定したのが R2-3tr である（写真 3-3）。

3 調査の成果

(1) R2-1 トレンチ (図 3-3-3-4)

R2-1tr は、山頂北側から城内部に抜ける谷が開けた緩斜面に 5 × 5m の規模で設定した。地表面の標高は最も高い北東隅で 71.34m、最も低い南西隅で 70.53m である。

調査の結果、永納山城跡との直接的な関係を示す遺構・遺物は確認できなかった。

表土（1層）下には、永納山の基盤である花崗岩に由来する砂、礫からなる崩落土層が厚く堆積し、その間に旧地表面の可能性のある層（17層、12層）が存在することを確認した。ただし、厳密にいうと、これらの層は上面が後世に削られているため、当時の地表面そのものではなく、地表面を形成していた層の残存部と考えている。

17層はシルト混じりの明褐色砂礫層で、トレンチ全体に広がる。17層検出面には多量の礫があり、その中には幅 100 cm 以上になるものも確認された。また、これらの礫の中には、17層よりさらに下に潜り込むものも存在する。このような状況から検出した礫には、本層の堆積前に存在した礫の頭が層の上面に出ているものと、本層の堆積後、あるいは堆積と同時期に崩落してきたものとが混在していると考えられる。本層は礫が多数混入する状況ではあるが、トレンチ全体に安定してみられる点、土層の土壌化が確認できる点に加え、平成 22 年度調査で鍛冶遺構を検出した H22-1tr の遺構検出面の土と類似する点から、過去のある時期の地表面であった可能性を想定した。しかし、遺構や遺物は確認できなかったため、本層が堆積した時期は特定できない。

12層は、シルト混じりの黒褐色砂礫層で、トレンチ全体に広がる。本層と 17層との間には薄い砂層、シルト・砂混じりの礫層といった土砂の崩落に伴い堆積した層が存在する。12層は 13～16層に比べ土壌化が進んでいることから、一定期間地表面であった可能性が考えられる。

次に 12層より上層の堆積をみると、11層はシルト混じりの褐色砂礫層で長辺 20～30 cm 前後の礫を多く含むことから、やや規模の大きな崩落に伴う堆積層と考えられる。この 11層が堆積した後に、それぞれ 15 cm 程度の厚さで比較的均等に堆積するのが 9層・10層である。これに対し 9層の上に堆積する 8層・7層は部分的な堆積層（8層）あるいは非常に薄い砂礫層（7層）であり、その上に再び 20～40 cm 程度の礫を中心とした礫混じりの砂層（6層）が堆積する。このような状況から、9層・10層は現地で何度も繰り返される土砂流出と流入の間に、一時期地表面であった可能性もある。しかし 17層・12層同様に遺物・遺構は検出されていないため、その堆積時期は不明である。

なお、9層・10層の堆積時期については、11層で弥生土器片が出土していることから少なくとも弥生時代以降の堆積層であることはわかる。

以上のように本トレンチでは、旧地表面の可能性のある層を複数面検出した。しかし、それらが永納山城に伴うものかどうかは不明である。

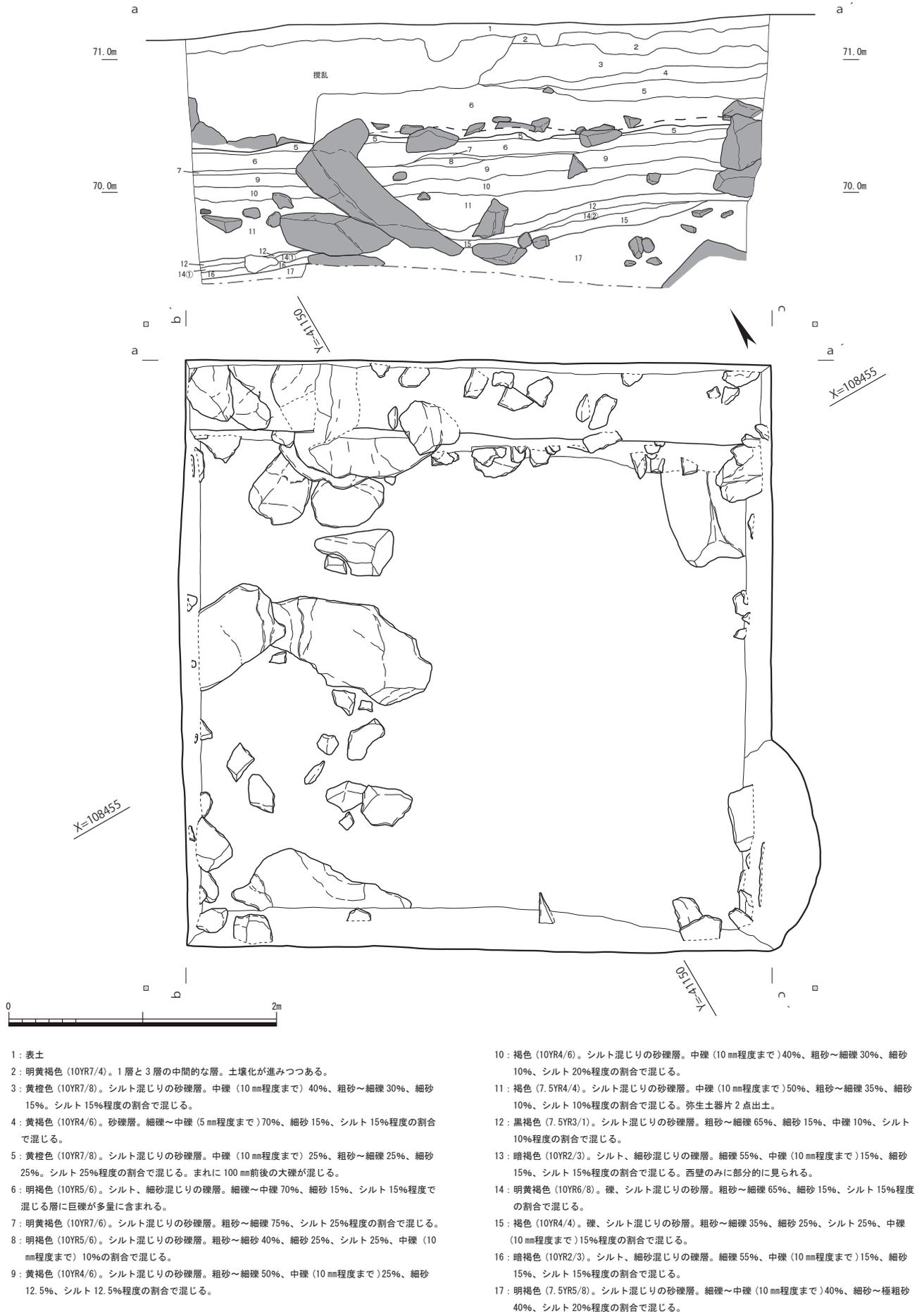


図 3 - 3 R2 - 1 トレンチ平面及び北壁断面図 (S = 1/40)

- 1 : 表土
- 2 : 明黄褐色 (10YR7/4)。1 層と 3 層の中間的な層。土壌化が進みつつある。
- 3 : 黄橙色 (10YR7/8)。シルト混じりの砂礫層。中礫 (10 mm 程度まで) 40%、粗砂～細礫 30%、細砂 15%。シルト 15% 程度の割合で混じる。
- 4 : 黄褐色 (10YR4/6)。砂礫層。細礫～中礫 (5 mm 程度まで) 70%、細砂 15%。シルト 15% 程度の割合で混じる。
- 5 : 黄橙色 (10YR7/8)。シルト混じりの砂礫層。中礫 (10 mm 程度まで) 25%、粗砂～細礫 25%、細砂 25%。シルト 25% 程度の割合で混じる。まれに 100 mm 前後の大礫が混じる。
- 6 : 明褐色 (10YR5/6)。シルト、細砂混じりの礫層。細礫～中礫 70%、細砂 15%、シルト 15% 程度で混じる層に巨礫が多量に含まれる。
- 7 : 明黄褐色 (10YR7/6)。シルト混じりの砂礫層。粗砂～細礫 75%、シルト 25% 程度の割合で混じる。
- 8 : 明褐色 (10YR5/6)。シルト混じりの砂礫層。粗砂～細砂 40%、細砂 25%、シルト 25%、中礫 (10 mm 程度まで) 10% 程度の割合で混じる。
- 9 : 黄褐色 (10YR4/6)。シルト混じりの砂礫層。粗砂～細礫 50%、中礫 (10 mm 程度まで) 25%、細砂 12.5%、シルト 12.5% 程度の割合で混じる。
- 10 : 褐色 (10YR4/6)。シルト混じりの砂礫層。中礫 (10 mm 程度まで) 40%、粗砂～細礫 30%、細砂 10%、シルト 20% 程度の割合で混じる。
- 11 : 褐色 (7.5YR4/4)。シルト混じりの砂礫層。中礫 (10 mm 程度まで) 50%、粗砂～細礫 35%、細砂 10%、シルト 10% 程度の割合で混じる。弥生土器片 2 点出土。
- 12 : 黒褐色 (7.5YR3/1)。シルト混じりの砂礫層。粗砂～細礫 65%、細砂 15%、中礫 10%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 13 : 暗褐色 (10YR2/3)。シルト、細砂混じりの礫層。細礫 55%、中礫 (10 mm 程度まで) 15%、細砂 15%、シルト 15% 程度の割合で混じる。西壁のみに部分的に見られる。
- 14 : 明黄褐色 (10YR6/8)。礫、シルト混じりの砂礫層。粗砂～細礫 65%、細砂 15%、シルト 15% 程度の割合で混じる。
- 15 : 褐色 (10YR4/4)。礫、シルト混じりの砂礫層。粗砂～細礫 35%、細砂 25%、シルト 25%、中礫 (10 mm 程度まで) 15% 程度の割合で混じる。
- 16 : 暗褐色 (10YR2/3)。シルト、細砂混じりの礫層。細礫 55%、中礫 (10 mm 程度まで) 15%、細砂 15%、シルト 15% 程度の割合で混じる。
- 17 : 明褐色 (7.5YR5/8)。シルト混じりの砂礫層。細礫～中礫 (10 mm 程度まで) 40%、粗砂～極粗砂 40%、シルト 20% 程度の割合で混じる。

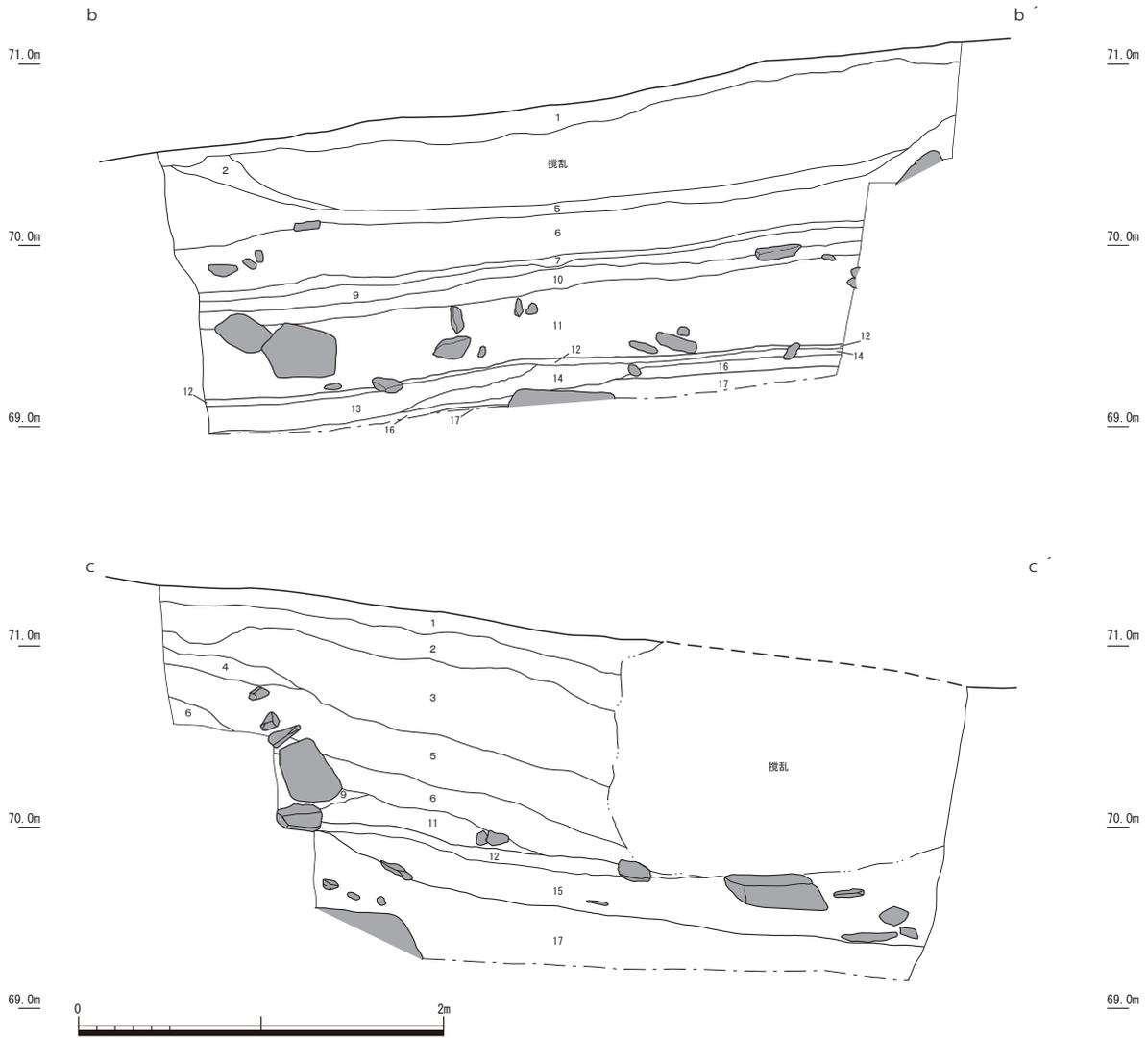


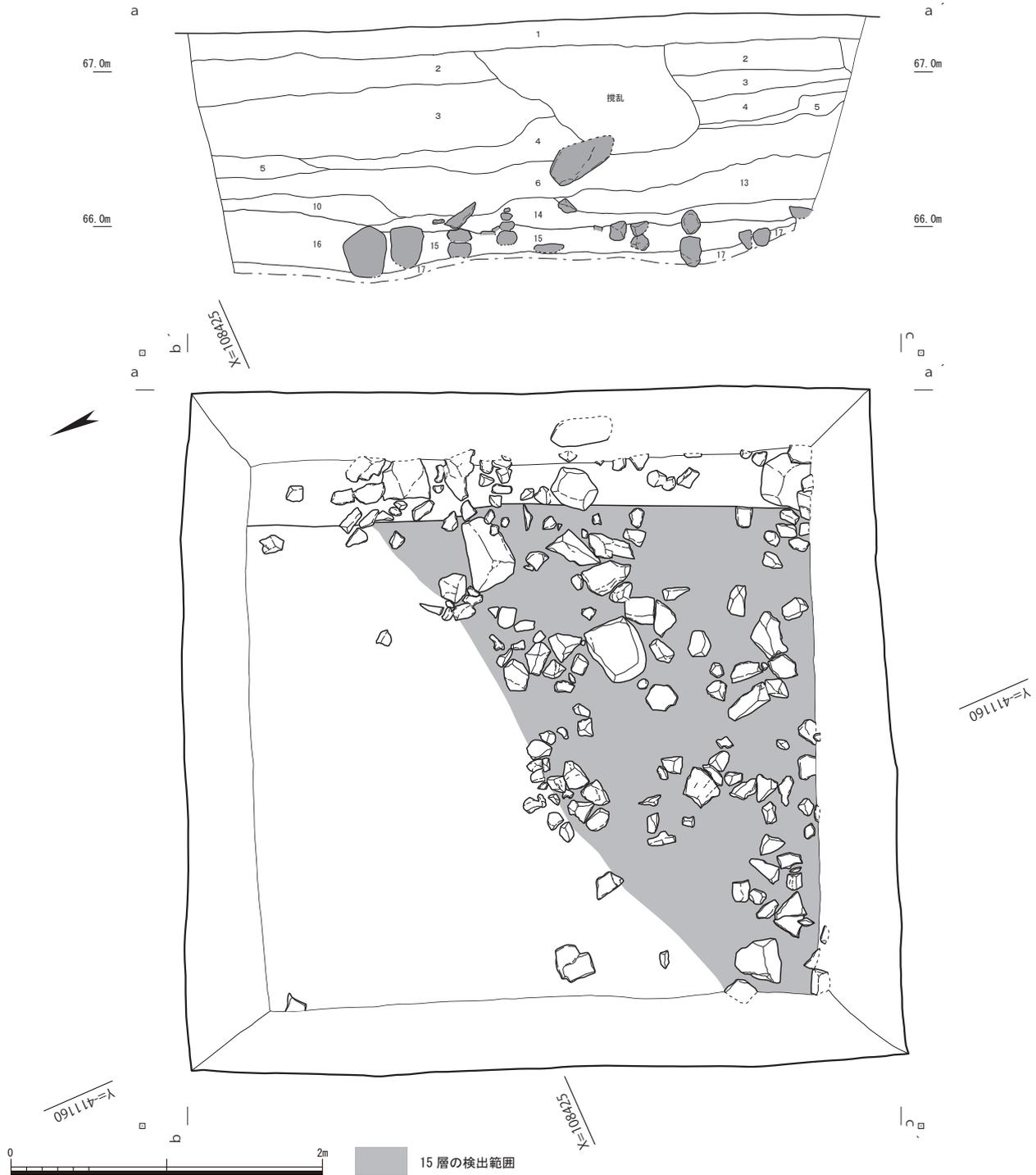
図 3-4 R2-1 トレンチ西壁・東壁断面図 (S = 1/40)

(2) R2-2 トレンチ (図 3-5・3-6)

R2-2tr は、南東部の尾根から中央の谷に向け下る緩斜面に 5 × 5m の規模で設置した。トレンチは、先述した鍛冶関連遺構から約 70m 谷側に下った場所に位置する。地表面の標高は、最も高い南東隅で 67.36m、最も低い北西隅で 66.56m である。

調査の結果、永納山城と直接的な関りを示す遺構・遺物は確認されなかった。

表土 (1 層) 下には、基本的に花崗岩に由来する砂、礫からなる崩落土層が厚く堆積する。ただし、R2-1tr でみられたような巨礫を多量に含む堆積は、本トレンチでは確認されず、細礫や中礫の混じる砂層が中心であった。これらの層を掘り下げていった結果、現地表面から約 110 ~ 130 cm 下で旧地表面の可能性のある層 (16 層) を検出した。トレンチ南西半部に堆積する 16 層は、褐色のシルト混じりの砂礫層で、土の特徴は鍛冶遺構を検出した H22-1tr の遺構検出面の土と類似する。また、16 層では、南半部で多量の礫が面的に広がる黒褐色土を検出した (15 層)。個々の礫は花崗岩の角礫であり、その大きさは長辺 10 ~ 40 cm 程度までのものが主体となる。なお、これらの礫には、面を揃えて並べたり、一部を加工するといったような人為的な様相を示す特徴は観察できなかった。そこで 15 層・16 層の堆積状況を確認するため、トレンチ東壁沿いを断ち割った結果、15 層が 16 層の上に堆積している状況を確認した。また、15・16 層検出面から約 15 ~ 30 cm 下で、暗褐色のシルト混じりの砂層 (17 層) を検出した。しかし、断ち割りによっても人為的な様相を確認できなかったことから、15 層は自然現象によって上方から流されてきた礫等が、16 層を



- 1 : 表土
- 2 : 明黄褐色 (10YR7/6)。細砂～中砂 30%、粗砂～極粗砂 30%、細礫～中礫 (5 mm まで) 30%、極細砂、シルトがそれぞれ 5% 程度の割合で混じる砂礫層。
- 3 : 明黄褐色 (10YR6/6)。細礫混じりの砂層 (砂と礫が互層状になる)。粗砂～極粗砂 50%、極細砂～中砂 20%、細礫 20%、シルトが 10% 程度の割合で混じる。
- 4 : 明黄褐色 (10YR6/6)。細礫混じりの砂層 (砂と礫が互層状になる)。粗砂～極粗砂 50%、極細砂～中砂 20%、細礫 20%、シルトが 10% 程度の割合で混じる。
- 5 : 明黄褐色 (10YR7/6)。シルト混じりの砂層。粗砂～極粗砂 40%、極細砂～中砂 40%、シルト 20% 程度の割合で混じる。
- 6 : 褐色 (10YR4/6)。シルト、細礫混じりの砂層。粗砂～極粗砂 35%、極細砂～中砂 35%、細礫 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 7 : 明黄褐色 (10YR6/6)。シルト混じりの砂層。稀に細礫が見られる。中砂～粗砂 70%、極細砂～細砂 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。北壁のみ見られる。
- 8 : 褐色 (10YR4/6)。シルト混じりの砂層。粗砂～極粗砂 50%、極細砂～中砂 40%、シルト 10% 程度の割合で混じる。北壁のみ見られる。
- 9 : 褐色 (10YR4/4)。シルト混じりの砂層。粗砂～極粗砂 50%、中砂 20%、極細砂～細砂 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。北壁のみ見られる。
- 10 : 明黄褐色 (10YR6/6)。シルト混じりの砂礫層。極粗砂～細礫 50%、極細砂～中砂 30%、シルトが 20% 程度の割合で混じる。
- 11 : 黄橙色 (10YR8/6)。細礫混じりの砂層。中砂～粗砂 30%、極細砂～細砂 30%、細礫 30%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 12 : 黄橙色 (10YR8/6)。細礫混じりの砂層。中砂～粗砂 30%、極細砂～細砂 30%、細礫 30%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 13 : 褐色 (10YR4/4)。シルト混じりの砂礫層。細礫～中礫 (10 mm 程度まで) 50%、粗砂～極粗砂 20%、極細砂～中砂 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 14 : 褐色 (10YR4/6)。細礫～中礫混じりの砂層。極細砂～中砂 40%、粗砂～極粗砂 30%、細礫～中礫 (10 mm 程度まで) 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。時期不明の土器片 2 点出土。
- 15 : 褐色 (10YR4/6)。細礫～中礫混じりの砂層。極細砂～中砂 40%、粗砂～極粗砂 30%、細礫～中礫 (10 mm 程度まで) 20%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 16 : 褐色 (10YR4/6)。シルト混じりの砂礫層。極粗砂～中礫 (5 mm 程度まで) 50%、極細砂～粗砂 40%、シルト 10% 程度の割合で混じる。
- 17 : 暗褐色 (7.5YR3/4)。シルト混じりの砂層。極粗砂 (まれに細礫混じる) 50%、極細砂～粗砂 40%、シルト 10% 程度の割合で混じる。

図 3-5 R2-2 トレンチ平面及び東壁断面図 (S = 1/40)

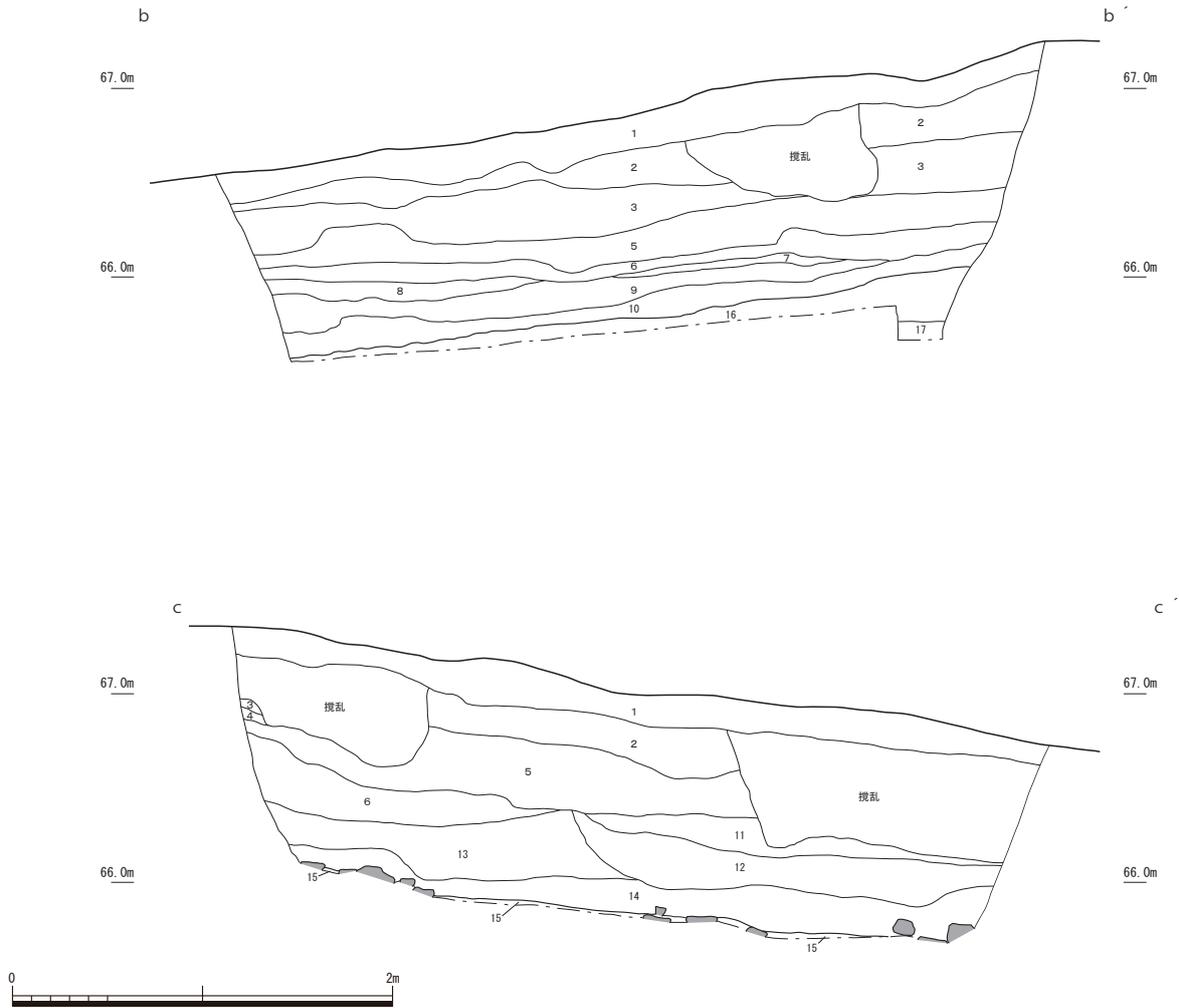


図3-6 R2-2トレンチ北壁・南壁断面図 (S = 1/40)

削って現地点に堆積した層である可能性が高いと判断した。

なお、15層・16層では、時期を判断できるような遺物は出土していないため、各層の堆積時期は不明である。また、遺物は14層中から時期不明の土器片が2点出土したのみである。

(3) R2-3トレンチ (図3-7・3-8)

本トレンチは、中央の谷に隣接する場所に位置し、現地表面の標高は約52.5mである。現地は史跡用地公有化事業に伴い平成25年度に西条市が土地を取得した場所で、公有化直前まで家屋が建っていた。地表面はほぼ水平に整地されていて、過去の宅地造成によってある程度の地形改変が行われていることは想定できたが、地下の状況に関してはこれまで未確認であり、今回調査を実施した。

調査の結果、永納山城との直接的な関係を示す遺構・遺物は確認できなかった。

表土(1層)は、3～6cm程度の厚さで堆積していた。この表土を除去するとトレンチ東壁付近で家屋に伴うコンクリート基礎を検出した。また、コンクリート基礎と面を揃えるようにやや土壌化した細礫混じりの中砂層(南壁4層・西壁10層・11層)を確認している。これらの層は、家屋の基礎とほぼ同時期の層、すなわち家屋建設時の層である可能性が高い。そして、これらの層より上層は、家屋撤去後の整地土であったと判断できる。

南壁4層、西壁10層・11層より下層は、基本的に細砂～粗砂を主体として細礫～10mm前後までの中礫の混じる砂礫層が、厚さ3cm前後、厚い部分では20cm前後の厚みを持ち堆積する(南壁5層～8層、西壁12層～30層)。色調は明黄褐色や黄橙色系統である。なお、南壁8層のように部分的に異なった砂礫層が

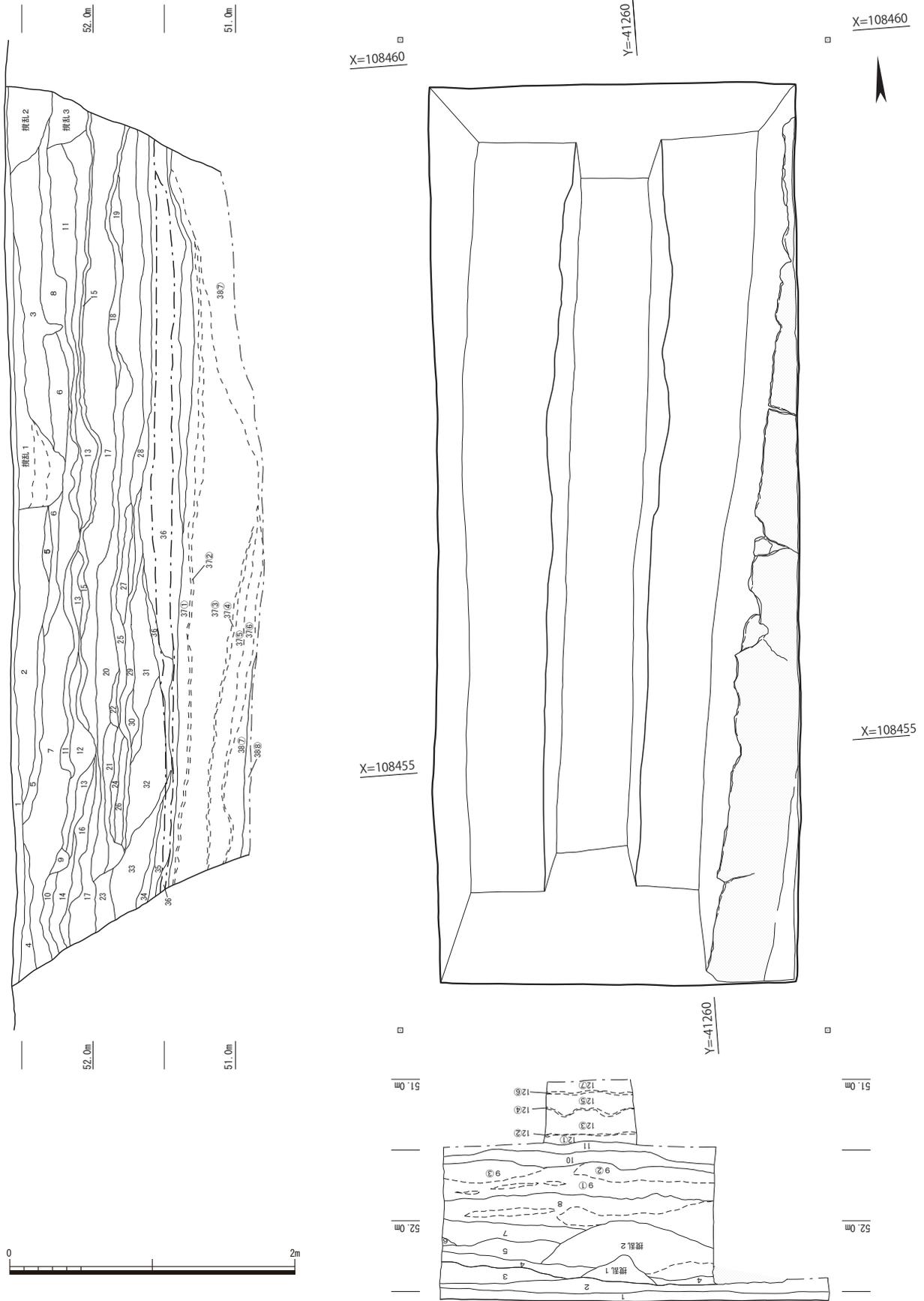


図3-7 R2-3 トレンチ平面・断面図 (S = 1/40)

《西壁》

1層：表土。

住宅撤去後整地に伴う埋土

2層：黄褐色（10YR5/8）。細礫～中礫（直径10mm程度まで）に粗砂が混じる。

3層：橙色（7.5YR6/6）。細礫～中礫（直径10mm程度まで）に粗砂が混じる。

4層：黄褐色（10YR5/6）。粗砂に直径3mm前後の中礫が多く混じる。

5層：黄褐色（10YR5/8）。細砂に細礫が混じる。

6層：にぶい黄褐色（10YR5/4）。粗砂に細礫が混じる。

7層：褐色（10YR4/6）。細砂に直径1～10mm程度の極粗砂～中礫が混じる。

8層：浅黄褐色（7.5YR8/4）。細砂にわずかに細礫が混じる。細礫は、特に層の下部に薄く堆積する。

9層：にぶい黄褐色（10YR4/3）。細砂に細礫～中礫（直径3mm程度）が多く混じる。

住宅基礎に伴う埋土

10層：にぶい黄褐色（10YR6/4）。中砂に細礫が少量混じる。

若干土壌化が進んだような色調を呈する。

11層：褐色（7.5YR4/4）。細砂に直径5mm程度の中礫が多く混じる。土壌化が進む。

住宅建設以前の堆積層

12層：にぶい黄褐色（10YR5/4）。細砂に細礫が混じる。

13層：にぶい黄褐色（10YR4/7）。細砂に中礫（直径10mm程度まで）が混じる。しまりのないボロボロとした土。

14層：明黄褐色（10YR7/6）中砂に細礫がまじる。かたくしまりあり。

15層：にぶい黄褐色（10YR5/4）。細砂に中礫（直径10mm程度まで）が混じる。かたくしまりのある土。トレンチ北半に厚さ2mm前後で薄く堆積する。

16層：褐色（10YR4/6）。細砂に細礫が混じる。やや粘性をもつ。

17層：黄褐色（10YR5/8）。細礫～中礫（直径10mm程度まで）に粗砂が混じる。

18層：褐色（10YR4/6）。粗砂に中礫（直径5mm程度）が混じる。かたくしまる。

19層：黄褐色（10YR8/8）。粗砂～中礫（直径10mm程度まで）混じる粗い土。

20層：黄褐色（10YR8/8）。粗砂～中礫（直径10mm程度まで）混じる粗い土。本来は19層と同一層か。

21層：黄褐色（10YR8/6）。細砂に中礫（直径10mm程度まで）が混じる。粗い。

22層：明黄褐色（10YR7/6）。細礫～中礫（直径5mm程度まで）に細砂が混じる。粗い。

23層：明黄褐色（10YR6/6）。細砂～中砂に中礫（直径3mm程度まで）が多く混じる。かたくしまる。

24層：明黄褐色（10YR7/6）。細礫～中礫（直径5mm程度まで）

に細砂が混じる。粗い。本来は22層と同一層か。

25層：明黄褐色（10YR7/6）。細砂に中礫（直径10mm程度まで）が混じる。ボロボロとしてしまりは無い。

26層：褐色（10YR4/6）。細砂に細礫～中礫（直径5mm程度まで）が多く混じる。しまりのある土。

27層：褐色（10YR4/6）。細砂に細礫～中礫（直径5mm程度まで）が多く混じる。しまりのある土。26層と同一層か。

28層：黄褐色（7.5YR7/8）。細砂に中礫（直径5mm程度まで）が少量混じる。わずかに粘性あり。

29層：明黄褐色（10YR7/6）。細砂。

30層：灰白色（10YR8/2）。細砂。

31層：浅黄褐色（10YR5/2）。細砂に細礫～中礫（直径10mm程度）が混じる。かたくしまる。

32層：浅黄褐色（10YR8/4）。細砂に粗砂が混じる。

33層：にぶい黄褐色（10YR7/2）。シルト～細砂。

34層：灰白色（10YR8/2）。細砂に粗砂～細礫が混じる。

35層：明黄褐色（10YR6/6）。細砂。かたくしまる。

36層：灰白色（10YR8/2）～褐灰色（10YR6/1）。シルト～細砂。

地山

37層：灰白色（10YR8/2）。細礫～中礫（直径10mm程度）の風化土（①・③・⑤・⑦）に明黄褐色（10YR7/6）が脈のように薄く入る（②・④・⑥）。

《南壁》

1層：表土。

住宅撤去後整地に伴う埋土

2層：黄褐色（10YR5/6）。粗砂に直径3mm前後の中礫が多く混じる。（西壁4層）

3層：褐色（10YR4/6）。細砂に直径1～10mm程度の極粗砂～中礫が混じる。（西壁7層）

住宅基礎に伴う埋土

4層：にぶい黄褐色（10YR6/4）。中砂に細礫が少量混じる。若干土壌化が進んだような色調を呈する。（西壁10層）

住宅建設以前の堆積層

5層：明黄褐色（10YR7/6）中砂に細礫がまじる。かたくしまり

のある土。（西壁14層）

6層：褐色（10YR4/6）。細砂に細礫が混じる。やや粘性をもつ。（西壁16層）

7層：黄褐色（10YR5/8）。細礫～中礫（直径10mm程度まで）に粗砂が混じる。（西壁17層）

8層：明黄（褐色（10YR6/6）。細砂～中砂に中礫（直径3mm程度まで）が多く混じる。かたくしまる。（西壁23層）

黄褐色（10YR7/8）の細砂混じりの中礫（直径10mm程度）の薄い堆積が部分的に混じる。

9層：にぶい黄褐色（10YR7/2）。シルト～細砂。（西壁33層）

黄褐色（10YR7/8）の細砂層が部分的に混じる（西壁34層）。

10層：明黄褐色（10YR6/6）。細砂。かたくしまる。（西壁35層）

11層：灰白色（10YR8/2）～褐灰色（10YR6/1）。シルト～細砂。（西壁36層）

地山

12層：灰白色（10YR8/2）。細礫～中礫（直径10mm程度）の風化土（①・③・⑤・⑦）に明黄褐色（10YR7/6）が脈のように薄く入る（②・④・⑥）。

図3-8 R2-3 トレンチ平面・断面図2（注記）

帯状に混じる状況も確認できた。したがって、西壁で細分した層についても、本来は同一層となるものも存在する可能性が高い。これらの層を構成する土は花崗岩類の風化土で、上流から流れてきた土砂が堆積したものと考えられる。その中に西壁26層・27層のように土壌化した薄い層を部分的に確認できた。これらは土壌化した旧地表面であった可能性もあるが、現状では判断できなかった。

南壁9層～11層、西壁31層～36層は、浅黄褐色や灰白色系統の色調を呈する。粒度はシルトや細砂の割合が増え、上層とは若干様相が異なる。南壁12層・西壁37層は地山である。平面精査の段階では硬く岩盤らしき部分も見られたが、大半は風化してボロボロと崩れる状況であった。また、厚さ数cm程度で明黄褐色の薄層が脈状に入る。

本トレンチは、地山まで検出したが、R2-1tr、R2-2trのような旧地表面の可能性の高い層は確認できなかった。これはトレンチ設置箇所が谷と谷との合流部付近に位置するという立地環境にあり、頻繁に土砂の流出、流入が繰り返されていたこともその一因と考えられる。

第2節 北東部城壁の調査の成果

1 調査の目的

R2-4tr は、基本計画・基本設計で定めた城壁整備箇所を設定した。調査の目的は、未調査であった城壁の構造を明らかにし、整備に必要な情報を得ることである。

2 トレンチ設置箇所と周辺の地形（図3-9・3-10）

本トレンチは、永納山城跡の北東部に位置する。調査区設置場所は、永納山山頂から北に向かって下る尾根の東側斜面にあたり、平成15年に実施した遺跡範囲確認調査で、比較的長区間にわたって列石を確認した。調査区中央付近と列石が据えられている斜面の下側は、近代以降の削平をうけ、幅約3mの平坦面が作られている。なお、この平坦面は現在散策路として利用されている。

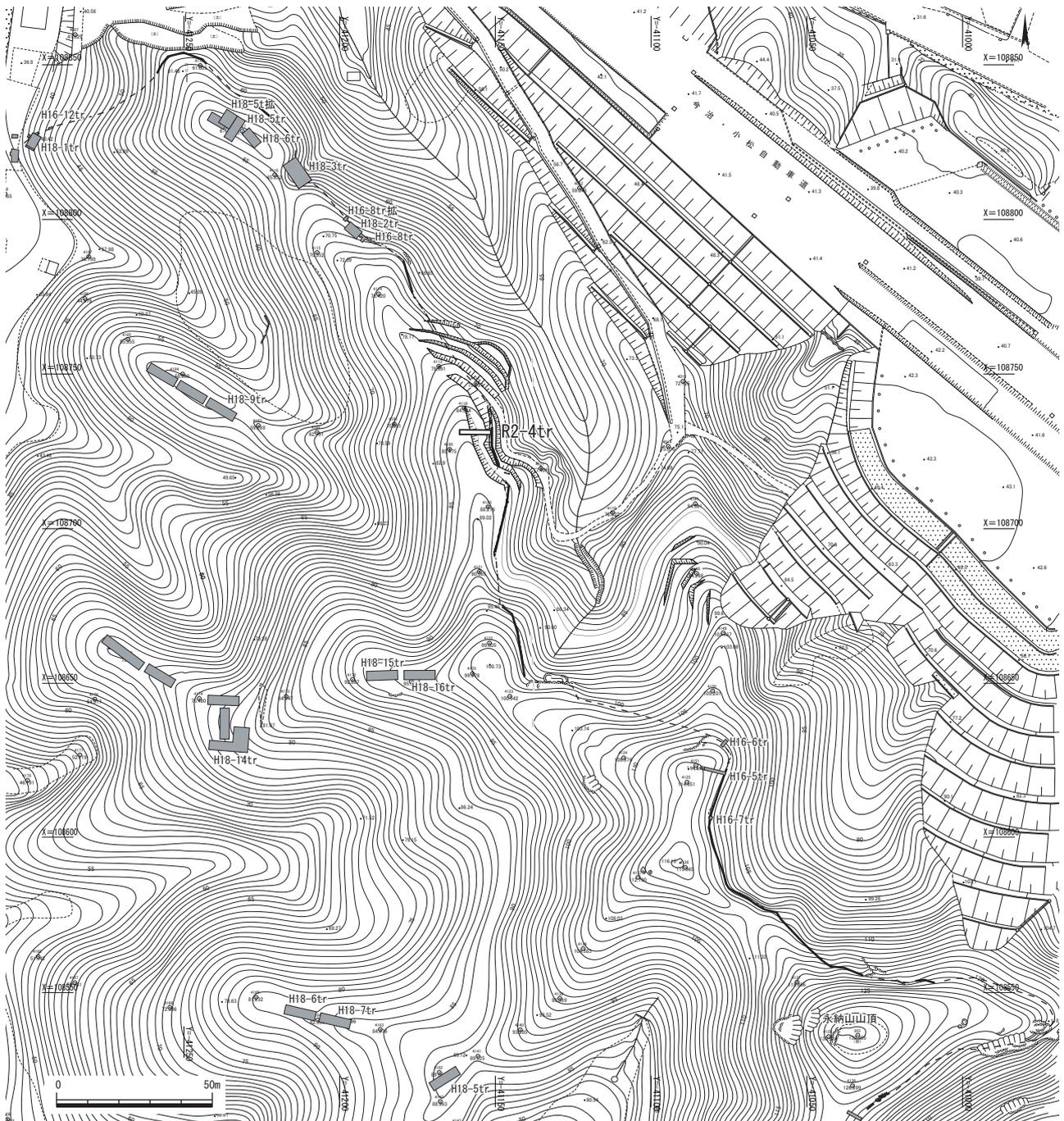


図3-9 R2-4 トレンチ位置図 (S = 1/2000)

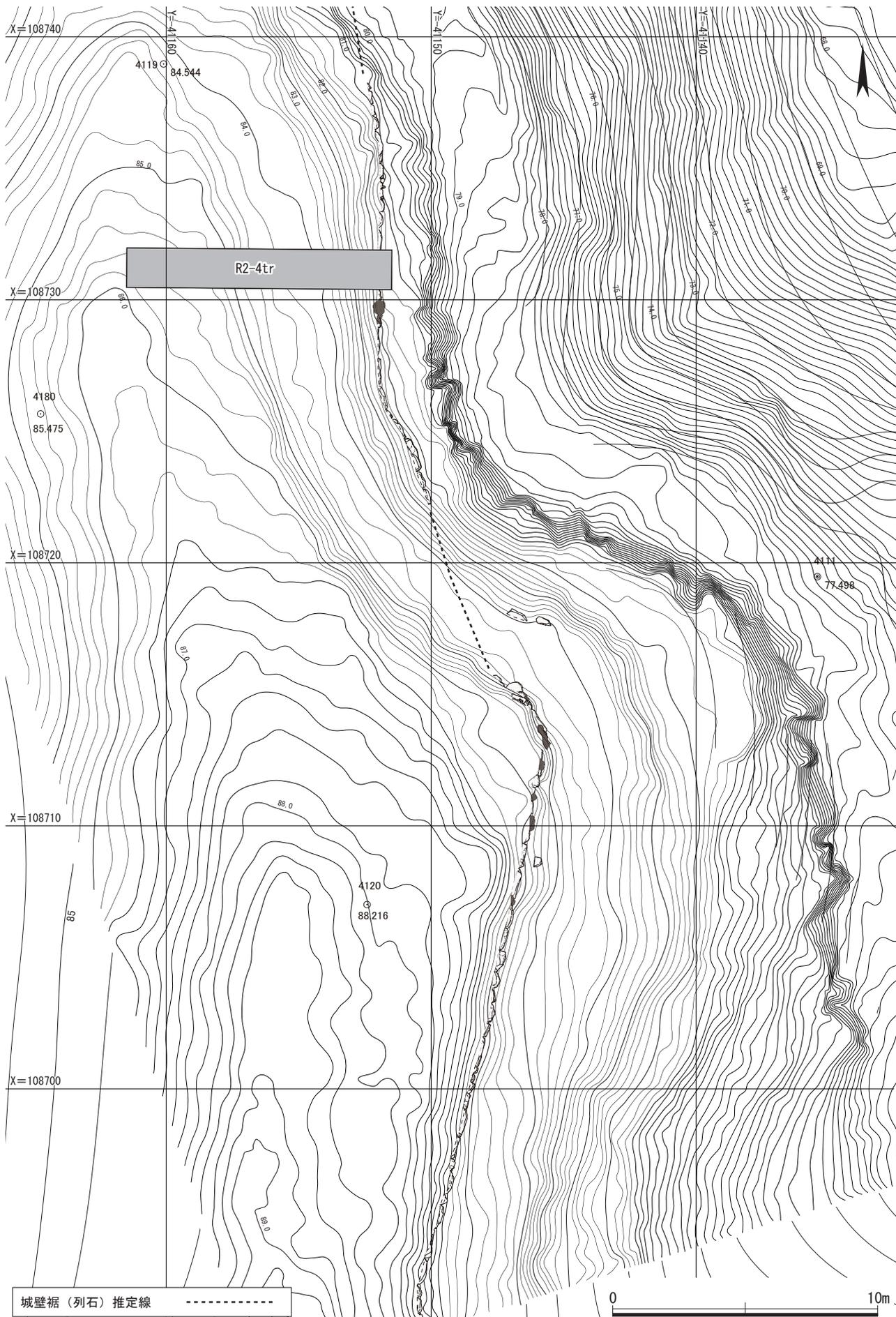


図 3 - 10 R2 - 4 トレンチ周辺地形図 (S = 1/200)

3 調査の成果 (図3-11・3-12)

R2-4tr は、尾根頂部から列石下部までを含み、1.5 × 7.25m の規模で設定した。尾根頂部の標高は約 86.0m、列石下部の標高は約 81.4m である。

調査の結果、列石の上に粗い盛土状の土塁が残存している状況を確認した。

土塁 表土、崩落土、攪乱層（1～3層）の下で、盛土を検出した。土塁の高さは、列石上面から土塁検出面天端までで最大約 2.5m を測る。土塁の角度は、最も傾斜の強いところで約 60° である。

土塁は粗い盛土を積み重ねることによって築かれ、23層に（4～26層）に分層できた。なお、4・24層は、わずかな土色の違いによりそれぞれ細分したが、本来は同一層の可能性もある。土塁構成土は、いずれの層も極粗粒砂が主体となり、版築のように突き固められた様子はなく、全体的にしまりが悪い。土塁断面

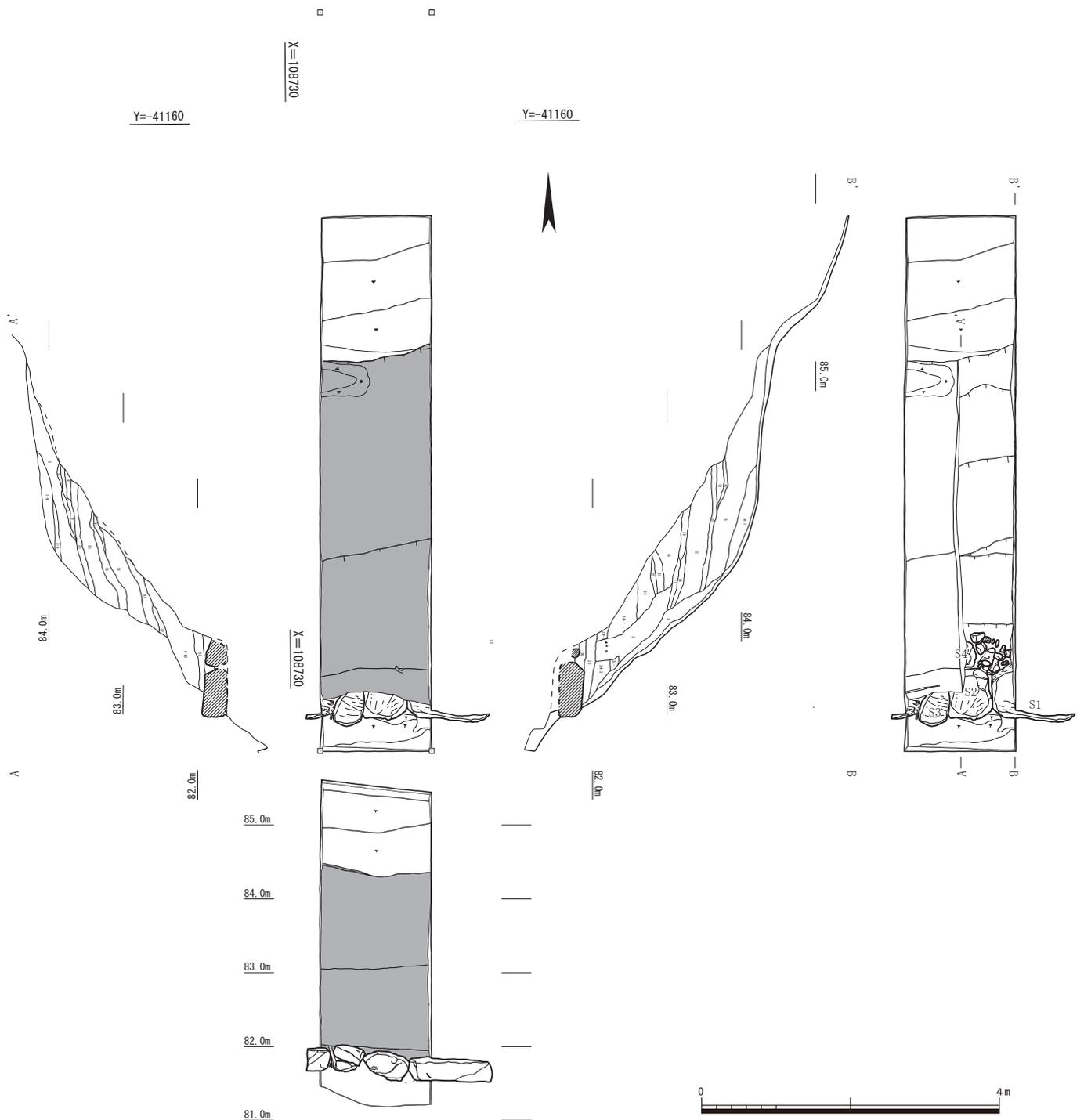
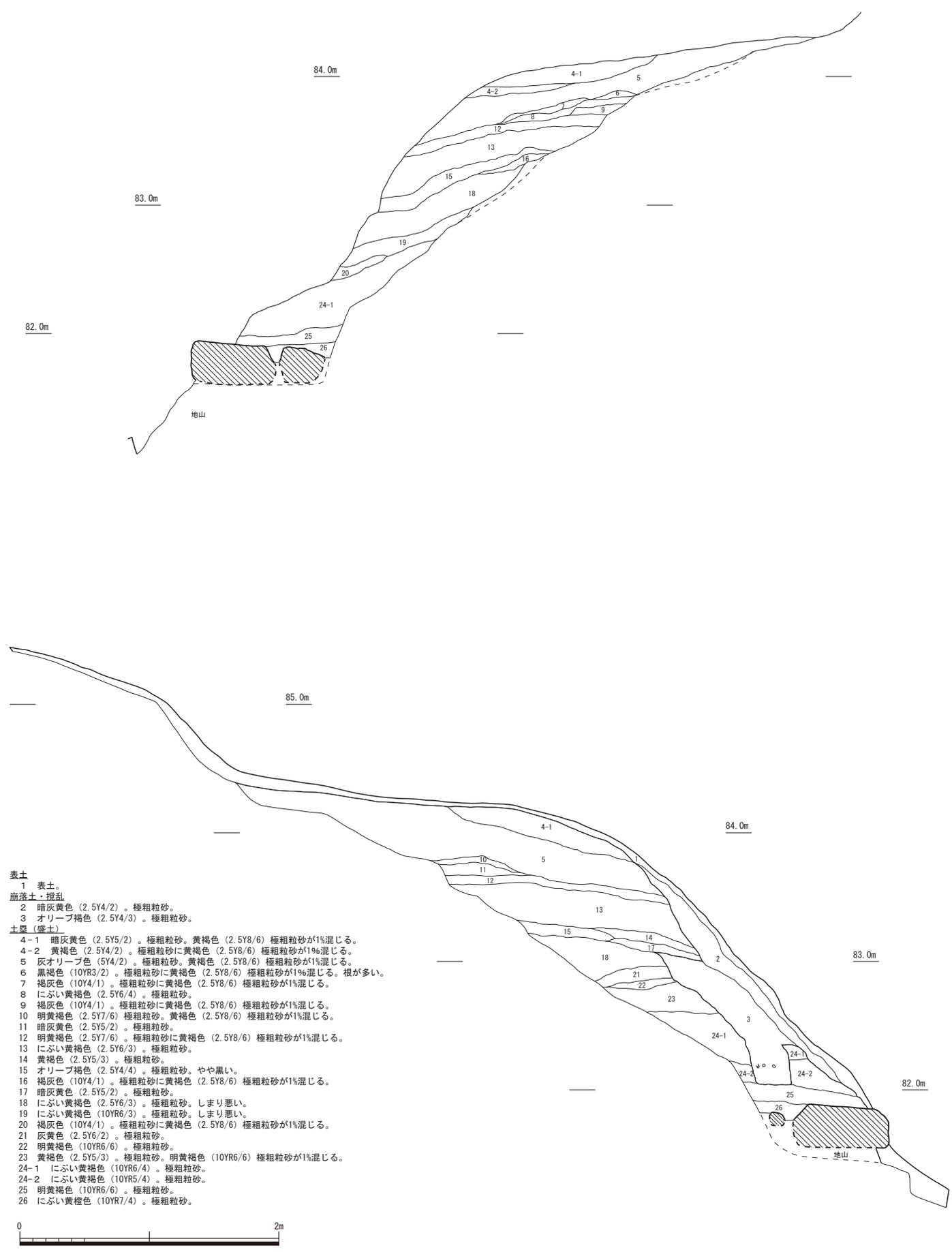


図3-11 R2-4 トレンチ平面・立面・断面図 (S = 1/80)



- 表土**
- 1 表土。
 - 崩落土・擾乱
 - 2 暗灰黄色 (2.5Y4/2)。極粗粒砂。
 - 3 オリーブ褐色 (2.5Y4/3)。極粗粒砂。
- 土壁 (盛土)**
- 4-1 暗灰黄色 (2.5Y5/2)。極粗粒砂。黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 4-2 黄褐色 (2.5Y4/2)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 5 灰オリーブ色 (5Y4/2)。極粗粒砂。黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 6 黒褐色 (10YR3/2)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。根が多い。
 - 7 褐灰色 (10Y4/1)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 8 にふい黄褐色 (2.5Y6/4)。極粗粒砂。
 - 9 褐灰色 (10Y4/1)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 10 明黄褐色 (2.5Y7/6) 極粗粒砂。黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 11 暗灰黄色 (2.5Y5/2)。極粗粒砂。
 - 12 明黄褐色 (2.5Y7/6)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 13 にふい黄褐色 (2.5Y6/3)。極粗粒砂。
 - 14 黄褐色 (2.5Y5/3)。極粗粒砂。
 - 15 オリーブ褐色 (2.5Y4/4)。極粗粒砂。やや黒い。
 - 16 褐灰色 (10Y4/1)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 17 暗灰黄色 (2.5Y5/2)。極粗粒砂。
 - 18 にふい黄褐色 (2.5Y6/3)。極粗粒砂。しまり悪い。
 - 19 にふい黄褐色 (10YR6/3)。極粗粒砂。しまり悪い。
 - 20 褐灰色 (10Y4/1)。極粗粒砂に黄褐色 (2.5Y8/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 21 灰黄色 (2.5Y6/2)。極粗粒砂。
 - 22 明黄褐色 (10YR6/6)。極粗粒砂。
 - 23 黄褐色 (2.5Y5/3)。極粗粒砂。明黄褐色 (10YR6/6) 極粗粒砂が1%混じる。
 - 24-1 にふい黄褐色 (10YR6/4)。極粗粒砂。
 - 24-2 にふい黄褐色 (10YR5/4)。極粗粒砂。
 - 25 明黄褐色 (10YR6/6)。極粗粒砂。
 - 26 にふい黄褐色 (10YR7/4)。極粗粒砂。

図 3 - 12 R2 - 4 トレンチ断面図 (S = 1/40)

の観察によると、層の傾斜は、尾根側では部分的に水平に近い傾斜を示す箇所もみられるが、概ね西側では約20～30°、東壁側では約10°、城内側から城外側に向け低くなる傾斜で積まれていた。層は、厚さ約20～35 cmと厚く積まれるところもある（4・5・13・18・24層）が、約5～13 cmと薄く積まれるところ（6～12・14～17・19～22・25・26層）も確認できる。

なお、土塁は尾根頂部までは残存していない。これは、先述のように後世に段状に削平されたためと考えられる。仮に尾根頂部まで土塁が築かれていた場合、土塁の高さは列石上面から約3.5 mとなる。

列石と基盤石 本トレンチでは、列石を3石確認した。いずれも花崗岩の割石である。北から順にS1～S3とする。

S1は幅約1.11 m、奥行き約75 cm、厚さ約30 cmを測る。列石北側が未調査であるため全貌が明らかでないが、本調査地周辺ではサイズの大きな部類に入る。S2は、幅約60 cm、奥行き約70 cm、厚さ約40 cm、S3は幅約40 cm、奥行き約45 cm、厚さ約35 cmをそれぞれ測る。木根により多少動いているとみられるが、いずれの列石も上面が揃っていることから、原位置を保っているものと考えられる。これらの3石は、S1から順に端部が重なるように並べられていることから、標高の低いS1から据えられていたことが明らかとなった。

基盤石は、いずれも花崗岩の割石で、S1、S2の背後で確認した。S1背後の基盤石は、大きさが不揃いの栗石状で、13石確認した。これらの大きさは、3～20 cmまでの幅があり、規格的に据えられたような様子はない。S2背後の基盤石であるS4は検出幅約15 cm、検出長約35 cmを測る。S4は上面が平坦に整えられている。また、基盤石の厚さは薄いもので3 cmのものもみられる。このような薄いものについては、列石や基盤石を現地で据える際に、割った破片を利用した可能性もあると考えている。

城壁の評価 本トレンチで検出した城壁は、城壁下部に列石・基盤石を据え、その上に土塁を築くという点において、永納山城跡通有の城壁構造を持つといえる。また、今回検出した城壁は、その高さから十分防御の機能を果たせるものであったであろう。

ここで注目したいのは、土塁の積み方である。本トレンチで検出した土塁は上述のように粗い盛土によるもので、永納山城跡の過去の調査で確認された版築土塁とは明らかに様相が異なる。このような違いは、土塁築造に従事した工人の違い等を示している可能性も考えられるが、その要因は明らかにできなかった。

今回の調査では、多様な城壁構造の一端を知ることができたことに加え、粗い盛土状土塁の施工区間の解明や版築土塁との境目の検出等、新たな課題を提示できたことも成果の一つである。

第4章 総括

今回の調査は、永納山城跡の整備に先立ち、遺構の状況を事前に確認することを目的として、城内と北東部で実施した。それぞれの調査内容の詳細については、第3章で述べたとおりであるが、本章では総括として、その成果を簡潔にまとめておきたい。

第1節 城内遺構の確認調査

1 遺構の存否について

城内の便益施設整備予定地に設置した3か所のトレンチ（R2-1tr・R2-2tr・R2-3tr）では、永納山城に伴う明確な遺構は確認されなかった。

2 旧地表面の可能性のある面の確認

R2-1tr・R2-2trでは、過去のある時期に地表面であった可能性のある層を確認した。その根拠としては、その層が土壌化しており、なおかつトレンチ内に安定して広がっていた点、そして平成22年度に鍛冶遺構等を検出した遺構面の土と類似した特徴を持つ点をあげることができる。しかし、これらのトレンチからは時期を特定できる遺物が出土していないため、永納山城との直接的な関連は不明である。

一方、R2-3trでは堆積土の中に、断片的に土壌化した層を確認した。しかし、その性格については、土砂流出を免れた旧地表面の一部が原位置に残っていたものか、あるいは土砂の流入に伴い上流から流されてきたものかの判断はできなかった。

3 土砂の堆積状況

いずれのトレンチでも現地表面の下には、山の斜面崩落に伴う土砂が厚く堆積していた。特にR2-1trでは、巨礫混じりの崩落土の堆積が顕著であった。

このような状況から、現在の地表面は、繰り返された土砂の流出と流入の後に形成されていること、またこの繰り返しにより、旧地表面の多くは流失、もしくは改変されていることを確認した。

第2節 北東部城壁確認調査

城壁構造の確認を目的としたR2-4trの調査では、調査前から露出していた列石の上に土塁が残存していることを確認した。そして、城壁の断割り調査の結果、この土塁は粗い盛土によって積み上げられており、その構造が過去の調査で確認された版築土塁とは様相を異にしていることが明らかとなった。このような土塁は、少数ではあるが北東部以外の調査でも確認されていて、永納山城の城壁築造手法の多様性を示すものとして重要である。

今後は土塁の特徴について、永納山城全体の中で整理を行い、将来的には各地の古代山城と比較検討することが必要となる。ここでは、ひとまずR2-4trが位置する北東部城壁のこれまでの調査成果と照らし合わせ、今回検出した城壁の特徴を明確にしておきたい。

なお、北東部城壁とは、永納山山頂から北側に伸びる約480mの範囲の城壁を指す。

1 R2-4trの城壁の特徴

R2-4trで検出した土塁は、列石上面から約2.5mの高さで残存していた。土塁の特徴を再度整理すると、以下ようになる。

層の傾斜は、尾根に直交する方向では水平に近い層も見られるが、その多くは尾根側（城内側）から城外側に向けて下がる。その傾斜は、10～30°程度である。一方、尾根に並行する方向では、尾根の傾斜に沿うように斜めに積まれている。各層の厚みは、全体的に厚く、厚さ5～35cm程度の単位で積み上げられる。

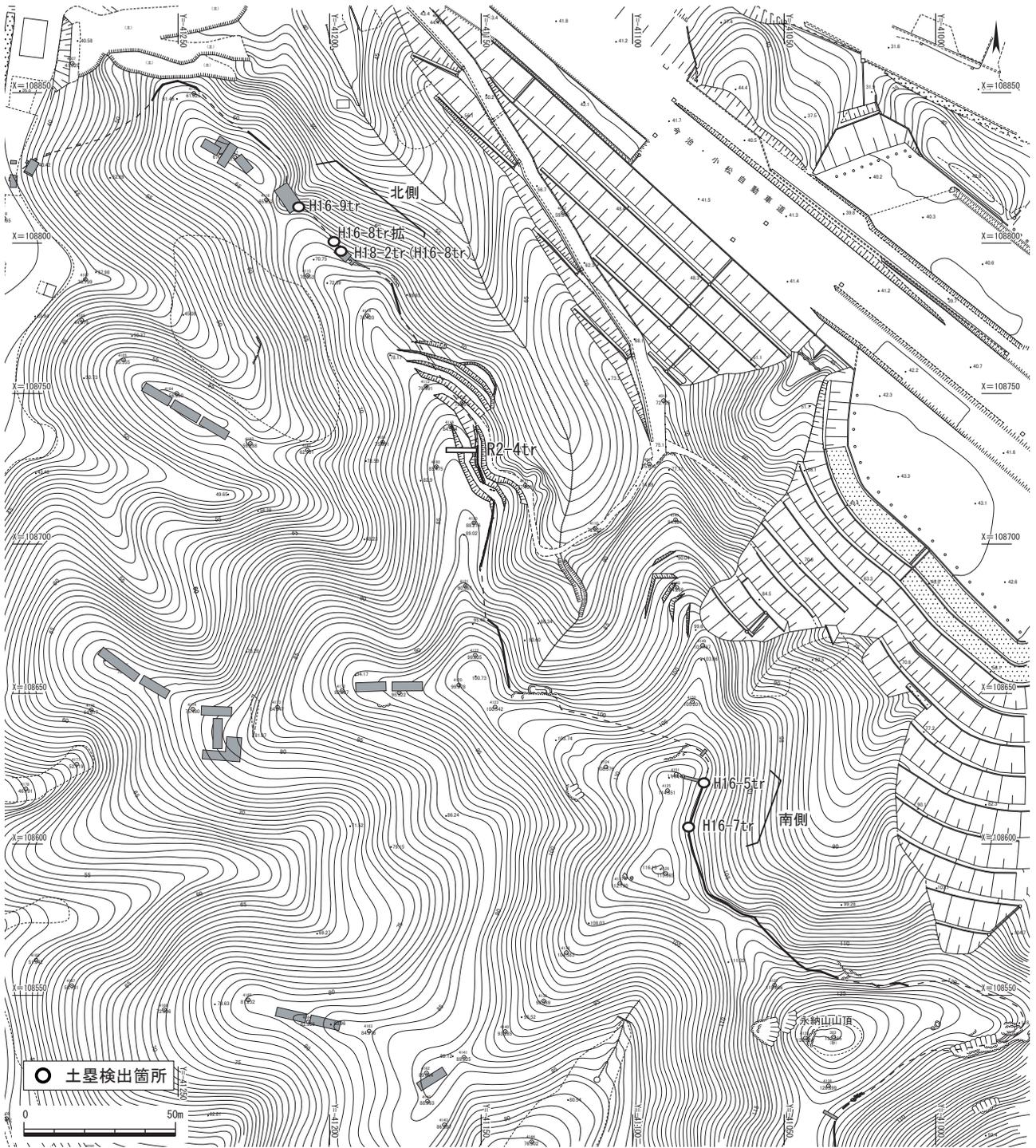


図4-1 北東部城壁調査地点の位置図(S=1/2000)

そして、各層は版築状につき固められたものではなく、粗い盛土といった表現が適する積み方で積まれる（図4-2 ①・写真4-1 ①）。

土塁の構成土は、花崗岩の風化土であるが、後述する周辺トレンチのような黒色系の土は含まれない。

2 過去の調査で確認した城壁の特徴

北東部では、これまで6か所で城壁確認調査を行い、そのうち5か所で土塁を検出している。調査地は、R2-4trの位置を基準に、便宜的に南北2つの範囲にまとめることができる（図4-1）。

このうちR2-4trの北側に位置するトレンチは、H18-2tr（旧H16-8tr）、H16-8tr北拡張区、H16-9trである。これらのトレンチの場所は約20mの範囲に収まり、R2-4trとの距離は最も近いH18-2trで約90mとなる。

一方、R2-4trの南側に位置するトレンチは、H16-5tr、H16-7trが該当する。この2つのトレンチ間の距

離は約14mで、R2-4trとの距離はH16-5trで約160mである。

(1) 北側のトレンチ

H18-2tr (旧H16-8tr) (図4-2 ②・写真4-1 ②)

土塁の高さは、列石上面から約140cmまで確認している。土塁は版築で築かれ、各層は固く突き固められる。層の厚さは土塁の上部と下部で若干異なり、下部の方が薄くなる。具体的には、列石から約80cmまでの高さは黄灰色砂質土と橙色粘質土が厚さ1～3cm程度と薄く積まれる。これに対し、それより上部では、10～15cm程度の厚さで積まれる層が目立つ。土塁の各層は、尾根に直交する方向では水平に積まれ、尾根に並行する方向には、列石とともに尾根の傾斜に沿うような傾斜で積まれる。なお、版築土塁の上層と下層で層の厚みが異なる点については、他の山城の例でも見られる特徴であることが指摘されている⁽¹⁾。土塁築造の共通した工法であった可能性も考えられる。

また、層の中には、炭や灰の混じる灰黄色の土層(8・15・22・24・28・31・37・41層)が存在する。

H16-8tr 北拡張区 (図4-2 ③・写真4-1 ③)

土塁の高さは、列石上面から約85cmまで確認している。土塁は版築で築かれ、土塁各層の厚さは、一部に15cm程度と厚い層も見あるが、基本的に3～5cm前後と薄い。土塁は、尾根に並行する方向では尾根の傾斜に沿うように約15～20度の勾配で南から北に向け傾斜して下る。なお、尾根に直交する方向については、断ち割り調査を行っていないため、その傾斜は不明である。

また、層の中には、炭の混じる暗褐色、黒褐色及び黒色土(5・9・11層)が存在する。

H16-9tr (図4-2 ④、写真4-1 ④)

土塁の高さは、列石上面から約72cmまで確認している。土塁は版築で築かれ、各層の厚さは、土塁下部(列石から約50cmの高さまで)では2～8cm程度と薄い、上部ではこれらの薄い層に混じり11～12cmとやや厚い層が見られる。

層の傾斜は、正面から見ると尾根の傾斜と並行する。なお、尾根に直交する方向については、断ち割り調査を行っていないため、その傾斜は不明である。

また、層の中には、炭の混じる黒褐色土層(13a層)が存在する。

北側まとめ

以上のような状況から北側の城壁には、ある程度共通した内容をもとめることができる。

- ① 土塁は版築で築かれ、層の厚みは、厚さ10cm以下と薄く積まれる層が主体となる。この状況は下部の方ほど顕著であり、上部では層の厚みが増す場合がある。
- ② 層の傾斜は、正面から見た場合、尾根の傾斜に沿って土塁の各層も傾斜している。一方尾根に直交する方向の傾斜はH18-2trでしか確認できていないが、水平に積まれている。
- ③ 土の特徴としては、版築の層の中に炭を含んだ灰色～黒色系の層が存在する。

(2) 南側のトレンチ

H16-5tr (図4-2 ⑤、写真4-1 ⑤)

土塁の高さは、列石上面から約1.2mまで確認した。土塁の各層は上部と下部で若干様相が異なる。土塁は版築で築かれる。列石から約50cmまでの高さは厚さ2～7cmと薄い単位で積み上げられ、それに対し上部は厚さ5cm程度の薄い層と厚さ15～20cmとやや厚い層が互層状に積まれる。

層の傾斜は、正面からみると尾根の傾斜に沿うように積まれ、尾根に直交する方向では水平に積まれている。土塁構成土には、炭を含む灰黄褐色と黄褐色土(8・12・15・17・20層)が存在する。

H16-7tr (図4-2 ⑥、写真4-1 ⑥)

土塁の確認高は約50cmである。土塁は版築で築かれ、各層は厚さ2～5cmと薄く積まれている。層の傾

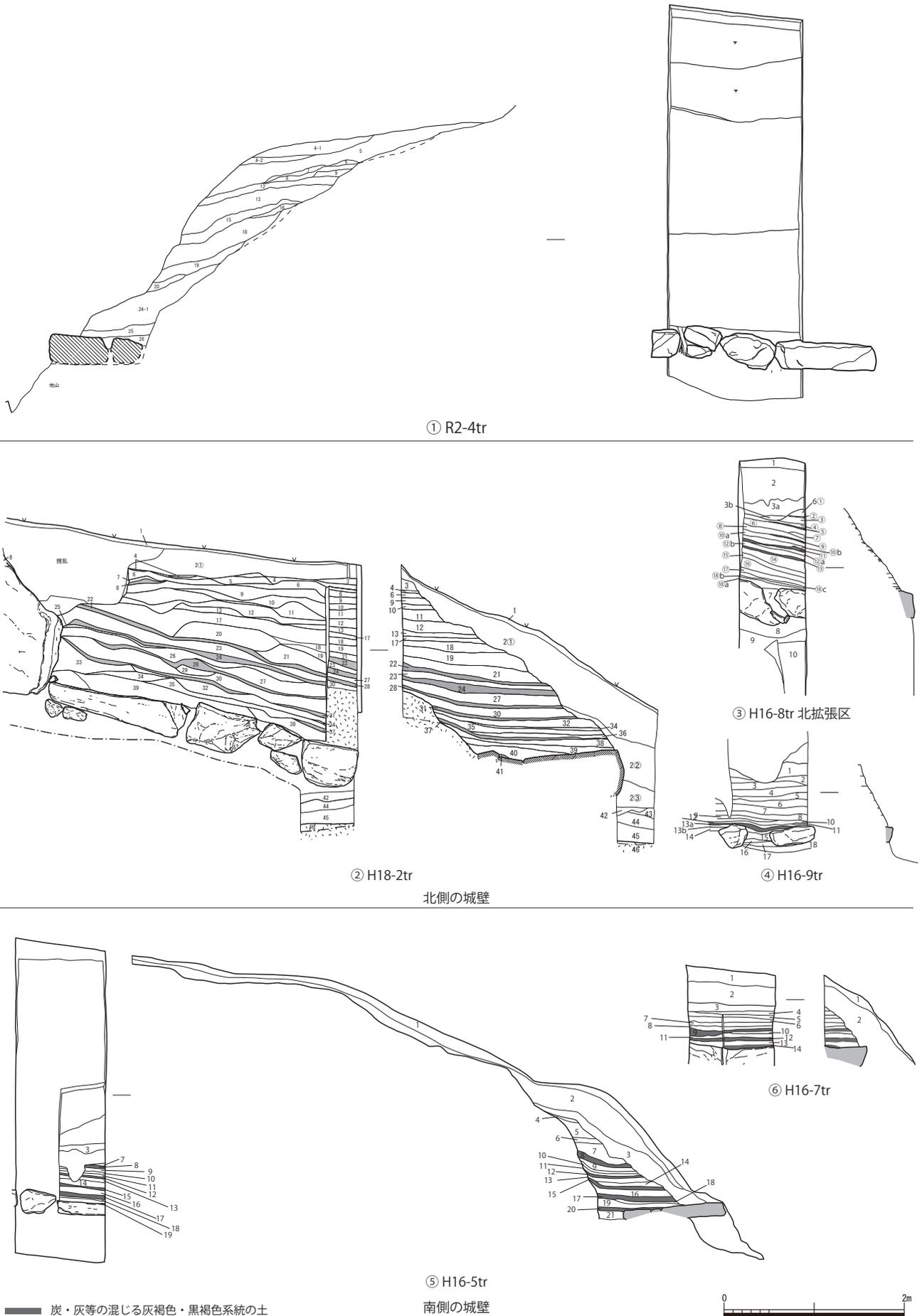


図4-2 北東部城壁の土層(S=1/60)



① R2-4tr



② H18-2tr



③ H16-8tr 北拡張区



④ H16-9tr
R2-4tr 北側のトレンチ



⑤ H16-5tr
R2-4tr 南側のトレンチ



⑥ H16-7tr

写真4-1 北東部城壁の土塁

斜は、正面からみると尾根の傾斜に沿うように傾斜して積まれ、城外側から城内側に向けては水平に積まれている。土塁構成土には、炭を含む暗褐色土（9・12・14層）が存在する。

南側まとめ

南側の土塁の特徴をまとめると、以下のとおりである。

- ① 土塁は版築で築かれ、層の厚さは2～7cm以下と薄く積まれる層が主体となる。この状況は下部のほうほど顕著であり、上部では層の厚みが増す。
- ② 層の傾斜は、正面から見た場合、尾根の傾斜に沿って列石とともに土塁の各層も傾斜している。尾根に直交する方向では、H16-5trでしか確認できていないが、水平に積まれている。
- ③ 土の特徴としては、版築の層の中に炭を含んだ灰色～黒色系の層が存在する。

3 まとめ

以上、北東部の土塁の特徴を整理した結果、R2-4trを挟んだ南北両側に築かれた土塁は、非常に共通した特徴をもつことを再確認した。この2地点の距離は約250m離れているため、これをもって約480mに及ぶ北東部の城壁の特徴をすべて示しているとはいえない。しかし、このような状況のみでは、北東部の土塁の特徴は「土を固く突き固めながら何層も薄く積み上げた版築土塁である」と評価しかねなかった。

これに対し、今回R2-4trの調査で明らかになったのが粗い盛土による土塁である。この城壁も基底部に列石を並べ、その上に土塁を築くという点では、過去調査の版築土塁と共通した認識を有していると考えられる。しかし、その上に積まれる土塁の構築方法には、大きな違いのあることが確認された。北東部城壁というごく限られた範囲でも、異なった技術が使用されていることが明らかとなったのである。

この違いの理由については、今後検討が必要である。例えば、これが自然地形的な特徴に起因するものなのか、あるいは実際に古代山城築城を担った集団や工事の体制等に起因するものなのか等、解決すべき課題は多い。しかし、城壁構築工法の多様性の一端を確認できたのは、今回調査の大きな成果と評価できる。

第3節 おわりに

今回の調査は、調査地点が4か所で、それぞれの規模もそれほど大きなものではなかった。これは調査の目的が整備に伴う事前確認調査であり、調査範囲も必要最低限としたためである。特に城内部の調査はピンポイントでトレンチを設定したが、整備の事前確認という点においては、その目的を達成できた。

一方で、永納山城を評価していく上では、前節まで述べたような成果と課題も明確になった。城内については、永納山城が機能していた時期の遺構面を確認することが課題である。広大な城内空間の中、部分的な調査だけでは、遺構面の時期や広がり特定するには十分とは言えない。仮に旧地表面と判断できる層を検出しても、時期の判断や遺構の存否を確認することが難しい点は、今回の調査で改めて浮き彫りとなった。

城壁構造の調査についても、現状では各調査地の成果を断片的に繋いでその特徴を評価している状況にある。城壁の全面的な調査は、遺構保存を考えると現実的ではないと思われるが、今回再確認した課題を解決するためには、ある程度長区間にわたる調査が必要である。

今後は既存の調査成果の再整理とともに、遺跡の内容解明のためにはどのような調査を実施すべきか、その後の保存や整備方法も踏まえた上で、慎重に検討していかなければならない。

【注】

- (1) 向井一雄 2016「日本古代山城の城壁構造 - 版築土塁を中心に -」『前韓国城壁学会会長車勇杰教授停年退任記念論叢 韓日城郭の新しい認識』前韓国城壁学会会長車勇杰教授停年退任記念論叢刊行委員会編
向井氏は、この中で「盛土の3層構造」として、土塁積み上げ工程における盛土の違いに言及している。

写 真 图 版

▼ R2-3tr ▼ R2-2tr ▼ R2-1tr

R2-3tr ▶
R2-1tr ▶
R2-2tr ▶



手前に見えるブルーシートは
R2年度に整備した南東部の
城壁

写真1 R2-1tr・R2-2tr・R2-3trの位置関係（南から）



写真2 R2-1tr（ブルーシートの場所）から見た南東部尾根



写真3 R2-2tr 調査前（南から）



写真4 R2-1tr 掘り下げ中（南から）

現地表面から70～80cm下で土砂崩落の状況が顕著に現れる。



写真5 R2-1tr 11層検出状況（南から）



写真6 R2-1tr 17層掘り下げ中（南から）



写真7 R2-1tr 調査停止面（南から）



写真8 R2-1tr 北壁



写真9 R2-1tr 東壁



写真10 R2-1tr 西壁



写真11 R2-2tr 調査前（北から）



写真12 R2-2tr 掘り下げ中（西から）



写真 13 R2-2tr 16 層礫検出状況 1 (西から)



写真 14 R2-2tr 16 層礫検出状況 2 (西から)

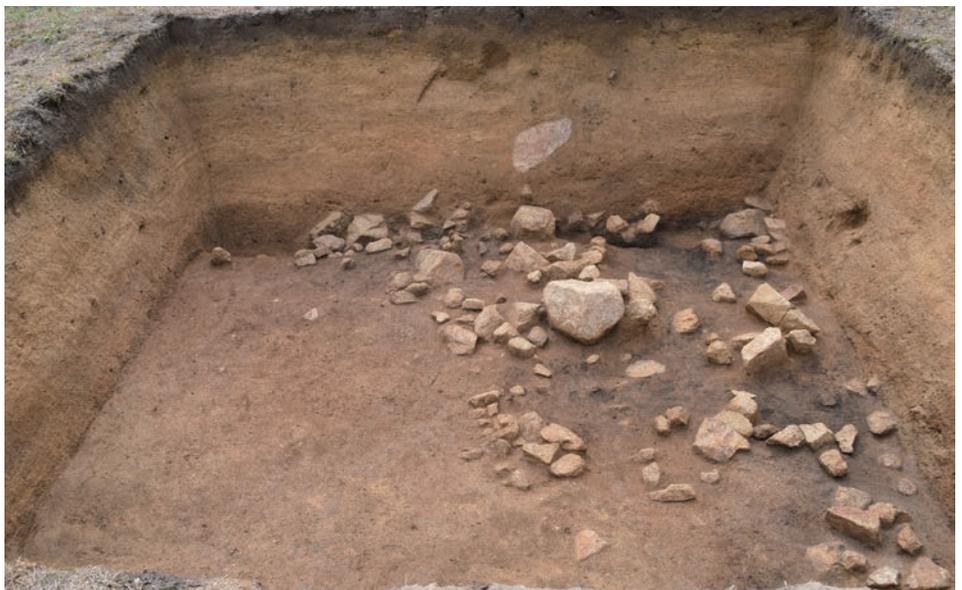


写真 15 R2-2tr 東壁沿いの断ち割り状況 (西から)



写真 16 R2-2tr 東壁沿いの断ち割り状況（北から）



写真 17 R2-2tr 東壁（スケールあり）



写真 18 R2-2tr 東壁



写真 19 R2-2tr 北壁



写真 20 R2-2tr 南壁



写真 21 R2-3tr 付近からみた南東部尾根



写真 22 R2-3tr 調査前 (西から)



写真 23 R2-3tr 東壁(スケールあり)



写真 24 R2-3tr 東壁



写真 25 R2-3tr 南壁 (スケールあり)



写真 26 R2-3tr 南壁



写真 27 R2-4tr 調査前の状況 (東から)



写真 28 R2-4 tr トレンチ設定後（東から）



写真 29 R2-4tr 土壘検出状況（北東から）



写真 30 R2-4tr 土壘検出状況（東から）



写真31 R2-4tr 土塁検出状況アップ(北東から)



写真32 R2-4tr 尾根頂部付近の状況(北東から)



写真33 R2-4tr 土塁断ち割り状況(東から)



写真34 R2-4tr 土壘断ち割り南壁断面(スケールあり)



写真35 R2-4tr 土壘断ち割り南壁断面



写真36 R2-4tr 土壘断ち割り北壁断面(スケールあり)



写真 37 R2-4tr 土塁断ち割り北壁断面



写真 38 R2-4tr 列石検出状況(北側面から)



写真 39 R2-4tr 列石検出状況(正面から)



写真 40 R2-4tr 列石検出状況（上面から）



写真 41 北東部城壁（R2-4tr 周辺）遠景 R2 年度伐採前



写真 42 北東部城壁線（R2-4tr 周辺）遠景 R2 年度伐採後

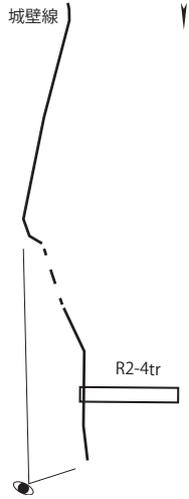


写真 43 北東部城壁 1

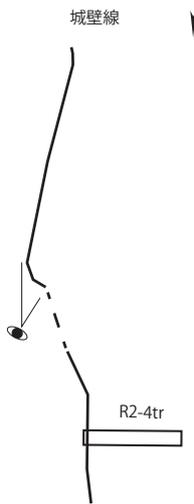


写真 44 北東部城壁 2

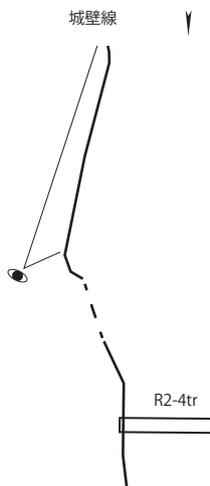


写真 45 北東部城壁 3

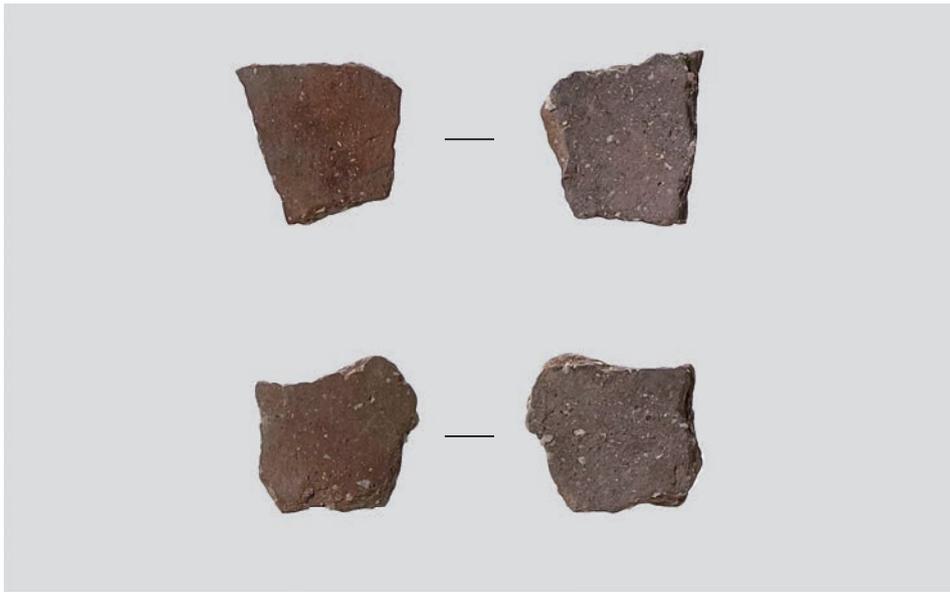


写真 46 R2-1tr 出土土器 (縮尺: 約 1/2)

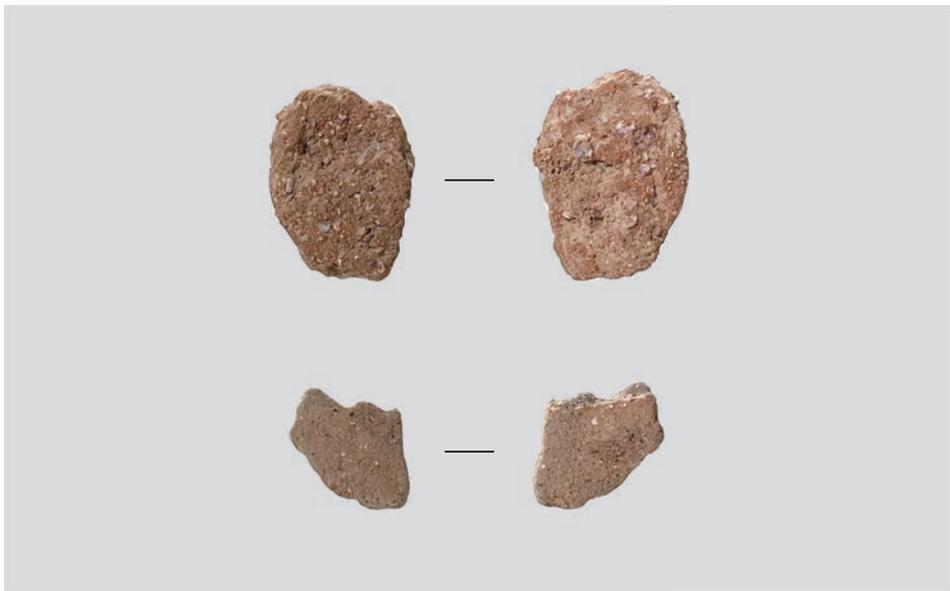


写真 47 R2-2tr 出土土器 (縮尺: 約 1/2)

報告書抄録

ふりがな	しせき えいのうさんじょうあと							
書名	史跡 永納山城跡IV							
副書名	—史跡整備に伴う事前確認調査報告書—							
シリーズ名	西条市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	渡邊 芳貴（編） 岡島 俊也							
編集機関	西条市教育委員会							
所在地	〒793 - 8601 愛媛県西条市明屋敷164番地 TEL(0897)56 - 5151 FAX (0897) 52 - 1210							
発行年月日	2022年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 / 〃	東経 。 / 〃	調査・整備期間	調査面積	原因
		市町村番号	遺跡番号					
えいのうさんじょうあと 永納山城跡	えひめけんさいじょうし 愛媛県西条市 かわらづくす 河原津・楠、 いまばりまごべえさく 今治市孫兵衛作	38206		33° 58' 39"	133° 03' 10"	20200513 ～ 20210308	86 m ²	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
永納山城跡	城館	古代	城壁	—				
要約	<p>永納山城跡は、平成17年に国史跡に指定された古代山城である。今回は整備に伴う事前確認として城内部、北東部で発掘調査を実施した。城内部は便益施設設置予定地を3か所調査した。その結果、永納山城跡に伴う遺構・遺物は確認されなかったが、旧地表面の可能性のある層を検出した。ただし、その層の形成時期は不明である。</p> <p>北東部城壁では、1か所で調査を行い、粗い盛土によって積まれた土塁を検出した。</p>							

西条市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集

史 跡 永 納 山 城 跡 IV

—史跡整備に伴う事前確認調査報告書—

(令和2年度調査)

2022年(令和4年)3月31日

発行 西条市教育委員会

愛媛県西条市明屋敷164番地

この電子書籍は、西条市埋蔵文化財調査報告第7集を底本として作成しました。本データは、閲覧を目的としています。詳細な図版などが必要な場合には、底本から引用してください。

底本は、西条市内の図書館、愛媛県内の市町教育委員会、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：史跡永納山城跡Ⅳ

発行：西条市教育委員会

〒793-8601

愛媛県西条市明屋敷 164 番地

電話： 0897-56-5151

電子書籍制作日：2024 年 8 月 1 日